



シンポジウム 岡崎市歴史まちづくり

家康公生誕の地にみる 歴史的な風情を磨く

記録集



— 目 次 —

- 2 頁 開催主旨
- 2 頁 プログラム
- 3 頁 出演者プロフィール
- 5 頁 開幕あいさつ
- 7 頁 第1部 事業報告
- 12 頁 第2部 基調講演
- 24 頁 第3部 パネルディスカッション
- 37 頁 閉幕あいさつ
- 38 頁 アンケート集計結果
- 40 頁 参考資料

— 開 催 概 要 —

- 日 時 平成 28 年 12 月 8 日 (木) 13 時 30 分～16 時 00 分
- 場 所 岡崎市図書館交流プラザ・りぶらホール
- 主 催 岡崎市都市整備部都市計画課・教育委員会事務局社会教育課

開催主旨

徳川家康公の生誕地である岡崎市では、ゆかりの社寺を始めとする市街地を舞台に、家康公の偉業を称える様々な顕彰活動や伝統行事が行われ、郷土の英傑を輩出した生誕地として市民の誇りや愛着の源泉となる歴史的風致が形成されています。

岡崎市を代表するこの歴史的風致を市民一人ひとりが再認識し、一層の誇りと愛着を持って継承できるよう、また、美しく風格ある岡崎を創生し、訪れる人々に感動を与えられるようなまちづくりを行うことで地域の活性化や観光振興につなげていけるよう、「岡崎市歴史的風致維持向上計画」において1つ目の歴史的風致である「家康公生誕の地にみる歴史的風致」の維持向上を目的としてシンポジウムを開催しました。



プログラム

13:30	開 幕	
13:40	第1部	事業報告 岡崎城跡整備基本計画案の概要報告
13:50	第2部	基調講演 歴史文化資産を活かしたまちづくり ～あなたの知らない？ 岡崎城跡の魅力～ 講師：三浦 正幸
14:50	休 憩	
15:00	第3部	パネルディスカッション 家康公ゆかりの資産を活かしたまちづくりの新たな展開 テーマ①「点から面につなげる歴史観光戦略」 テーマ②「岡崎城跡（総構え）の見える化」 コーディネーター：瀬口 哲夫 パネリスト：徳川 恒孝、三浦 正幸、内田 康宏
16:00	閉 幕	

出演者プロフィール

基調講演講師・パネルディスカッションパネリスト

三浦 正幸

広島大学大学院 教授

岡崎市歴史まちづくり協議会 委員

岡崎城跡整備基本計画検討委員会 委員



略歴

1954年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、工学博士、一級建築士。広島大学工学部助手、広島大学工学部助教授を経て、広島大学大学院文学研究科教授。

委員等

岡崎市歴史まちづくり協議会委員、岡崎城跡整備基本計画検討委員会委員。

上田城・松代城・名古屋城・赤穂城・岡山城・福山城・松山城・宇和島城・原爆ドームなどの国史跡の委員ほか多数を兼任。

著書等

「城の鑑賞基礎知識」「城のつくり方図典」「神社の本殿」「平清盛と宮島」など著書多数。岡山城東隅櫓・浜松城天守門・吉川元春館跡台所など、史跡の復原建築を設計。

パネルディスカッションコーディネーター

瀬口 哲夫

岡崎市歴史まちづくり協議会会長

名古屋市立大学名誉教授



パネルディスカッションパネリスト

徳川 恒孝

(公財) 徳川記念財団 理事長

岡崎市歴史まちづくり名誉顧問

徳川宗家第十八代当主



パネルディスカッションパネリスト

内田 康宏

岡崎市長



開幕あいさつ

岡崎市長 内田 康宏



皆様、こんにちは。岡崎市長の内田康宏でございます。本日の歴史まちづくりシンポジウム開催にあたり、実に多くの皆様方にご参集いただきまして、厚く御礼を申し上げます。さて、本年の5月、本市の歴史まちづくりに関する計画となります「岡崎市歴史的風致維持向上計画」が国の認定を受けることができました。この認定により「歴史まちづくり法」の制度を活用し、単体の「点」として保存してきた本市が持つ多様な歴史文化資産を、地域のまちづくりの中で一体的に「面」として整備することができるようになりました。具体的には、本市の最大の特徴であります岡崎城跡の整備、家康公ゆかりの地であります大樹寺や滝山寺等の重要文化財の周辺整備、そして大樹寺から岡崎城への眺望景観の保全に取り組んでまいりたいと考えております。

本日のシンポジウムでは、「家康公生誕の地にみる歴史的な風情を磨く」ためのまちづくりにつきまして、皆様と共に考えてまいりたいと思っております。第1部の事業報告におきましては、岡崎城跡の整備に向けた現在作成中の計画となります、「岡崎城跡整備基本計画（案）」の概要につきまして、ご説明申し上げます。第2部では、私も何度かお話をお伺いする度に岡崎城の価値や魅力を大変分かりやすく教えていただきます、日本の城郭研究の第一人者であります広島大学大学院教授の三浦正幸先生をお招きいたしまして、「あなたの知らない？岡崎城跡の魅力」と題しまして講演をしていただくことになっております。三浦先生の家系は、おじいさんの代まで岡崎市にお住まいであったそうです。本日も大変興味深いお話をお聞かせいただけるものと楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。そして、第3部のパネルディスカッションにおきましては、私も参加させていただきまして、本市の歴史まちづくりの名誉顧問をお願いしております徳川十八代当主徳川恒孝様、歴史まちづくり協議会の委員をお願いしております三浦正幸先生、そして同協議会の会長を務めていただいております瀬口哲夫先生と、四者で「家康公ゆかりの資産を活かしたまちづくりの新たな展開」につきまして考えていきたいと思っております。

本日のシンポジウムを契機といたしまして、「家康公生誕の地にみる歴史的な風情を磨く」ために本市の歴史まちづくりへの関心や機運がより一層高まり、地域の活性化や観光振興に繋がりますことを期待いたしまして、私からの開催の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞ、最後までお付き合いいただけますようよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

徳川 恒孝 氏



皆様、こんにちは。本日は岡崎市で、岡崎市の素晴らしさに関する大変大きなシンポジウムが行われるということで、喜んで東京からまいりました。

私は、色んなところで岡崎市とは仲良くさせていただいており、長い間子ども達の作文コンクールを実施しております。1千近い応募がございまして、岡崎市で学んでいる学生達がいかに歴史、徳川家等に興味があるかが伝わってくる面白い作文がたくさんあります。大体最後のところで、「私も家康公のような人になりたいです。」という文が入っているのですが、そういう形で、江戸時代の平和さや、それを築かれた家康公について、子ども達に繋がっていくことは大変嬉しく、これからも続けていきたいと思っております。

その他に、家康公に関わる色々な質問に対して答えていただく「家康公検定」というものを実施し、上は95歳の方から下は8歳の子どもまで参加していただきました。大体2～11歳の方と65歳くらいの方が多いのですが、質問に全て答えられる方に表彰状をお渡しして、ずっと実施してまいりました。ありとあらゆる家康公の質問があったのですが、十数年に渡って質問を出しておりますとついに質問が尽きてしまい、残念ながら今年を持ちまして終了せざるを得なくなりました。

これからも子ども達の作文コンクールは一生懸命続けてまいりたいと思いますし、是非お子様たちも含めこの町の歴史的な素晴らしさを分かっていただけのように、市長さん以下、頑張っていたきたいと思っております。どうもご清聴、ありがとうございます。

第1部 事業報告

岡崎市 教育委員会事務局 教育部長 石川 啓二



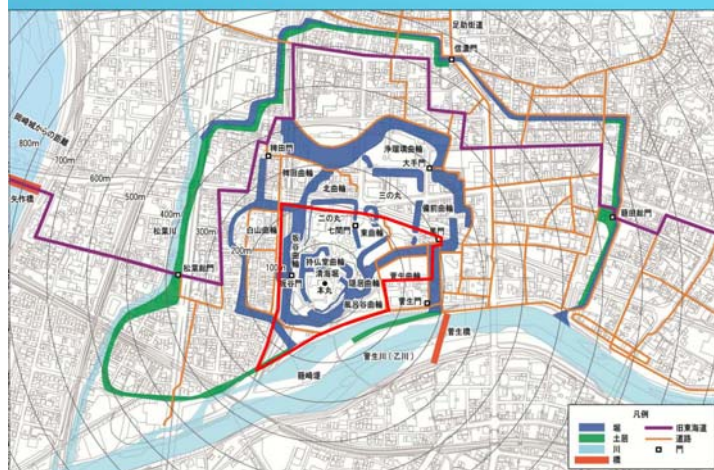
岡崎城跡整備基本計画案の概要報告

こんにちは。岡崎市教育委員会教育部長の石川でございます。教育委員会では、岡崎城跡の史跡としての価値を確実に未来へ伝え、城下町を囲む総構えの岡崎城跡の姿が見てわかる整備を目指し、計画の検討を進めています。この度、計画案がまとまりましたので、「岡崎城跡整備基本計画（改訂版）」の概要についてお話しさせていただきます。市の中心部を流れる乙川とお城がつくりだす景観は、岡崎市民の私たちにとっても、観光で訪れる来訪者にとっても、最も岡崎を感じさせてくれる景観であるかと思えます。



「岡崎城」というと、現在の市の史跡に指定をされている岡崎公園や天守を思い浮かべられるかもしれませんが。実際の岡崎城は、城下町を堀で囲む「総構え」の城で、江戸時代の規模は、東西約1.5キロ、南北約1キロに広がり、近世城郭としては江戸城などに次ぐ日本屈指の広さを誇ります。このことは、本市の誇りでもあり、最大の資源でもあります。また、岡崎城を中心としてまちが発展し、現在の都市の基礎となっています。今後

岡崎城跡の総構え

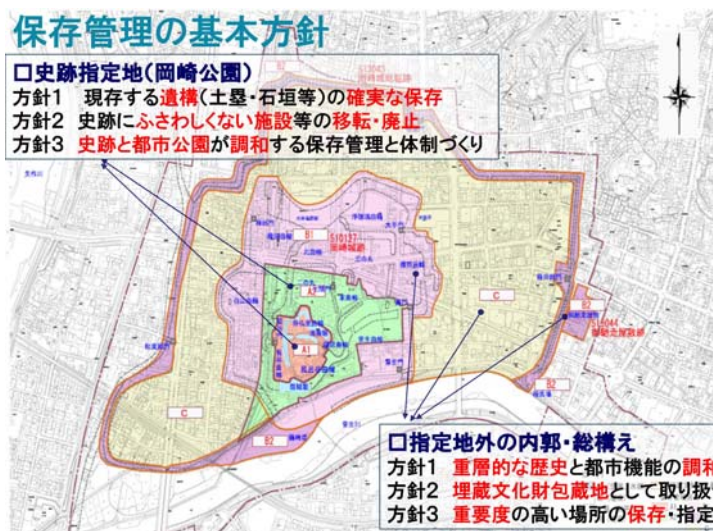


は、この魅力や価値を誰もが見て、触れて、分かりやすく体感してもらえようような整備をしたいと考えています。

岡崎城の特性や価値としては、徳川家康が誕生した城であること、天下統一の足固めとなった城であることを始め、歴代城主が築いた各時代の堀や石垣が残ること、都市の中で豊かな緑と、歴史的な景観を成していることなどが挙げられます。



岡崎城跡は、岡崎公園としての利用があり、周辺は市街地となっています。岡崎城跡の保存管理の基本方針として、史跡指定地である岡崎公園については、その価値を将来に伝えるため、現存する遺構を確実に保存します。石碑など、史跡にふさわしくない施設を移転・廃止していきます。史跡と都市公園が調和する保存管理と体制づくりをしていきます。市街地となっている総構えの範囲については、岡崎城であった歴史と、現在の都市機能の調和した空間をつくっていきます。地下にある遺構は、埋蔵文化財法蔵地として扱い、発掘調査などで残存状況を確認します。新たに確認された遺構で、重要度が高い場所については保存や復元を検討してまいります。



整備計画を検討するにあたり、ゾーニングを行います。岡崎公園内の史跡指定地では 内郭1・内郭2ゾーンとして遺構を将来にわたり確実に保全しながら歴史文化資産としての価値を顕在化する、本丸を中心とした地区とします。その周辺の市街地は、内郭3・総構えゾーンとして、武家屋敷と町家からなる岡崎城総構えや東海道二十七曲りへ回遊性を持たせる地区として事業を計画しています。



まず、調査研究計画として、発掘・石垣等の現地調査、絵図・文書など文献資料の調査を継続的に実施し、城郭全体の姿を明らかにしていきます。また、調査の成果と合わせ、市民の皆様方がお持ちの資料の情報をいただき、データベースにしていきます。現在、教育委員会では岡崎城の古写真・絵図を探しておりますので、岡崎城下を知る貴重な資料になるかもしれませんので、よろしくお願いいたします。また、今年度より城下の歴史的建造物の調査を実施しています。

◎調査研究計画

- ◆城郭全体を解明する継続的な調査研究の実施
- ◆資料と調査成果の収集・整理
- ◆岡崎城跡の調査研究を継続的に推進する体制の整備

- 発掘調査
- 石垣調査
- 歴史的建造物等調査
- 資料調査






保存修復計画では、現在見ることができる遺構、また地下に埋蔵されている遺構を含め、未来へ伝えるため、確実に保存していきます。石垣の保存について修理計画をつくり、オリジナルの石垣をできるだけ残しながら修復を行っていきます。遺構を傷めている樹木については、管理計画をつくり緊急度に応じて伐採も行っていきます。

◎保存修復計画

- ◆城郭遺構の確実な保存
- ◆遺構保存と景観に配慮した樹木対策
- ◆新出遺構の価値確認と保存
- ◆公開活用にあつる保存修復方法の検討
- ◆新たに確認された価値の保存

- 石垣、土塁の保存修復
- 遺構と景観に影響する樹木の整理
- 史跡への追加指定・復元の検討




復元整備計画については岡崎城跡の見える化をするため、調査等により、史実に基づいた復元をしていきます。位置・遺構等が明らかになったものは、実物の復元のほか、平面での表示やバーチャルリアリティなどによる多様な表示・復元方法で見える化を図ります。現在の都市機能と調和しながら、史跡の価値を顕在化するために効果的な整備箇所を選び十分検討して整備を実施します。

◎復元整備計画

- ◆史実に基づく復元整備
- ◆顕在化のための多様な表示・復元方法の検討
- ◆史跡理解のための効果的な整備箇所の検討






環境整備計画として二十七曲りなど岡崎城の見所をめぐり当時の姿を実感をしながら楽しめる周遊ルートを整備することで、総構えであった市街地への回遊性を高めます。岡崎公園内の植栽は、遺構の保全や石垣や天守の見える歴史的景観の形成を図り、岡崎城跡の価値を高める樹木管理をしていきます。サインや案内板については、周囲と調和する伝統美を感じさせるデザインで統一し、海外などからの多様な観光客にも対応した情報を提供できるものにします。全体として岡崎城跡の歴史的な風致を高めていきます。

◎環境整備計画

周遊ルート（動線計画）

- ◆城郭遺構等を実感する動線設定
- ◆史跡重視の柔軟なバリアフリー

植栽管理


- ◆岡崎城跡の価値を高める植栽管理

サイン・案内板（便益施設）

- ◆デザインの整合と統一
- ◆多様な来訪者へ対応した情報提供

その他の施設等

- ◆遺構の保存と歴史的景観の保全に配慮した施設整備
- ◆史跡の価値向上のための廃止・移転



公開活用計画として、刊行物、ホームページなど、あらゆる手段により岡崎城跡の情報を広く発信していきます。発掘現場や史跡整備の工事を公開し、文化財への理解を高めます。ここ、りぶらホールも岡崎城の大林寺郭堀（だいらんじくるわぼり）の中になりますが、歴史的な地名と場所が一致するよう現地表示し、周知を図っていきます。市民や来訪者の皆様の理解を深めていただく情報発信をしていきます。

◎公開活用計画

- ◆資料・データの公開活用
- ◆調査成果を活用した整備
- ◆歴史的名称の周知

発掘調査現場の公開

刊行物等の発行

大林寺郭堀⇒りぶら



管理運営計画として、これまでの公園管理に、新たに史跡として植栽管理などの管理運営を行っていきます。岡崎城跡の歴史文化資産としての魅力や価値を利活用できる継続的な体制を整えていくことも必要になります。

◎管理運営計画

- ◆史跡としての管理運営
- ◆継続性のある岡崎城跡の管理運営体制の整備

史跡としての管理体制

史跡

公園

展示施設



事業計画では、短期の事業計画として歴史まちづくり事業、リバーフロント地区整備事業などの市の関連事業と連携し、実施してまいります。岡崎城跡の歴史的な価値を「見える化」するために発掘や資料の調査で、まず史実を確認する事業を進めます。その発掘調査成果を活かした城郭遺構の表示、復元整備を検討します。石垣については、危険度の高い箇所を計画的に保存・修復していきます。城郭全体を分かりやすくサインや現地表示を行い、まちづくりや観光にも資するものとしていきます。中長期事業計画では、短期の事業を継続していき、さらに岡崎城跡の歴史的な価値と景観を向上し、岡崎に住む皆様の誇りの醸成を図ってまいります。

短期事業計画 (H29~37年度)

- ◆発掘等の調査事業の推進
- ◆石垣の保存修復
- ◆歴史まちづくり事業との連携

□岡崎城跡の**歴史的価値の表現**
⇒城郭遺構の位置表示「見える化」

- 総構え(総堀)
- 東海道二十七曲り

↓

城下町への回遊性創出
発掘+サイン+表示+復元



中長期事業計画 (H38年度~)

- ◆調査研究事業の継続
- ◆史跡にふさわしくない施設の移転・廃止の継続
- ◆岡崎城の価値を「見える化」する遺構の復元

→岡崎城跡の**歴史的価値・景観の向上**



この「岡崎城跡整備基本計画」の改定案について、パブリックコメントを12月20日から1月20日まで1ヶ月間実施します。市民に親しまれるよりよい岡崎城跡とするために、皆様からの御意見をいただきたいとおもいますので、よろしく願いいたします。御清聴いただき、ありがとうございました。

パブリックコメント

~この計画案への御意見を募集します~

□募集期間/

平成28年12月20日(火) ~平成29年1月20日(金)



第2部 基調講演

三浦 正幸 氏



あなたの知らない？ 岡崎城跡の魅力

おいでくださいませ、ありがとうございます。岡崎城が日本でも天下の名城であったという話をしようと思います。「日本 100 名城」にはときどき落選をする、100 のボーダーライン位の城とされていますが、実は日本の歴史の中で考えてみますと、岡崎城は大変有名で大事な城です。私は少なくとも日本 10 大名城に入っているだろうと確信しています。

～岡崎城の魅力～

日本の近世城郭の発展の歴史がよく分かる日本唯一の城

それでは早速、岡崎城の魅力を申し上げたいと思います。配布資料（配布資料は本記録集 40 頁目に掲載しています）の 1 頁目（岡崎城跡と市街地の重ね図）、図の右側に記載した大体の沿革をご覧ください。岡崎城の一番大事な点はその歴史にあります。岡崎城は松平清康公がおつくりになり、お孫様の徳川家康公が生まれた城です。岡崎城の歴史的画期となった時期が 2 つあります。

まず天正十八年（1590 年）で、小田原にいた北条氏を豊臣秀吉が滅ぼした時です。大体三河から静岡県のおよそ大半、長野県、山梨県辺りを所領としていた大領主・徳川家康公は、北条家の所領であった関東へ移されます。したがって、岡崎城は天正十八年までは家康公の城として造られた城なのです。家康公がいた時の岡崎城は、石垣は全く造らず、天守も建てなかった、全くの土造りの城でした。この時家康公は豊臣秀吉と同盟を結んでおり、その前は織田信長と同盟を結んでいました。織田信長と豊臣秀吉は、近世の城郭、すなわち石垣と天守がある城を造り始め、全国に普及した人なのですが、家康公はその 2 人とは全く異なり、天守と石垣に対して全く価値を見出さなかった、正しくは、実用的なものを良く知っていたと思われまます。

天正十八年に家康公が関東に移ると家康領は全て豊臣領になり、今度は豊臣家の大名である田中吉政が岡崎城に入りました。豊臣秀吉は、自分の配下の大名に城について 2 つ命令を出していたようです。まず目立つところに石垣を造ること、全てではなく目立つところだけです。それからもう 1 つは、城の象徴たる天守を造ることです。要するに家康公の造っていた城とは全く異なり、天守と石垣を造ることで、これは豊臣政権の城であるとなりました。そのように天正十八年からの 10 年間、田中吉政が岡

崎城を石垣と天守のある城に大改造しました。

その次の画期となりますのは慶長五年（1600年）の関ヶ原の戦いです。関ヶ原の戦いでは東軍と西軍に分かれて戦いますが、東軍の大名は元家康公が所領としていた東海地方と中部地方の辺りを治めていた豊臣家の大名です。したがって当然、田中吉政も東軍に与します。東軍が戦争に勝ったため、大名らは立身出世し、西日本の方に大量の所領をもらい移転していきました。田中吉政も福岡県柳川の大領主として大出世し、岡崎城から出て行ってしまいました。岡崎城を含め、中部・東海地方にあった城は、慶長の五年を境に、豊臣政権から再び徳川の支配下、要するに譜代大名の城に変わっていきます。

岡崎城は、最初徳川家の城、それから10年間だけ豊臣家の城、その後譜代大名の城というように変化・発展していったことから、岡崎城は日本の歴史の中心であると言えます。要するに、信長・秀吉によって天下統一がされていき、最終的に徳川幕府ができるまでの天下統一の過程である天正十八年と慶長五年の一番重要な歴史だった時における、城の発展の歴史の中心にあった城であるという点で非常に歴史的価値が高いのです。

それからもうひとつ、これが一番大事なことですが、天正十八年と慶長五年により時期が3つに分かれます。最初の頃の家康公の、土で造られた天守と石垣が無い城。その次が、豊臣政権の天守と石垣がある城。それから最後が、徳川幕府の譜代大名の城。この3つの歴史を全てそのまま残している城は、日本全国の中で岡崎城だけです。他の城ではどれかが無くなってしまっています。例えば、静岡にあります駿府城は、関ヶ原の戦いの後に大改修をしてしまいっており、それ以前の歴史が全く分からなくなっています。3つの歴史が分かるということは、実は日本の近世城郭の発展の歴史が全て良く分かるという意味で、岡崎城が一番魅力があるということになります。

総堀

資料1頁目、左側の図をご覧ください。現在の市街地の上に、岡崎城の昔のお堀の位置を落とし込んだ図で、現物は「新編 岡崎市史」に載っているものです。第1部事業報告で紹介があったように、岡崎城は東西約1.5km、南北約1kmの大変大きな城です。一般的に広島城等外様の大城郭と言われる城は、大体0.5km四方が普通です。外様の大城郭の城と比べると、岡崎城は5倍以上の大きさがあることになります。更に、岡崎藩は5万石という小さな禄高で江戸時代ずっと過ごしますけれども、日本全国の5万石から10万石級位の大名の一般的な城と比べると、岡崎城の面積は10倍から20倍の面積があるということになります。要するに破格に大きい。どれ位大きいかと言いますと、まず一番大きいのは江戸城でこれは破格に大きいです。その次が姫路城、だいぶ小さくなって次が熊本城で、熊本城より若干小さい位が岡崎城ですから、日本で第4位です。私は良く日本十大巨大城郭と言っておりますけれども、その中のBIG4に入っている。とにかく、やたらと大きい。

やたらと大きい理由は簡単で、資料の図で一番外側を巡っている堀が総堀（城下町の外側を巡っているお堀）と言う堀です。大きな城はみんな総堀を持っていました。一番有名なものは今から四百年前に落城してしまった豊臣大阪城で、総堀を持っていました。城下町を全部囲っていた大城郭だったので。16世紀の最末期に、この総構え（総堀）を造ることが段々流行し始めたのですが、随分お金がかかり、大事業になってしまうため、江戸時代で総構えを持った城は、結局殆どありませんでした。名古屋城も総構えの堀を一部造り始めたところで、豊臣家が滅びてしまったので、総構えを造るのは挫折してしまったのです。したがって城下町を囲っている総構えを持っている岡崎城はとにかく大き

かったということになります。岡崎市の特徴として東海道二十七曲りが非常に有名ですが、27回も曲がってしまった理由は、城下町が総構えの中に入っている（城下町を総構えで守っている）ためです。一番外側に総構えと、その内側に外堀と言う堀がありますが、総構えと外堀の間を東海道が通って行こうとすると、どうしてもお堀にあたって曲がり、またお堀にあたって曲がり、必然的に27回曲がらないうと城下町を通り抜けられません。要するに総構えがあったために道が27回曲がるという日本城郭の中で最も街道をたくさん曲げた城ということになります。

堀と櫓の数

総構えだけではなく、資料1頁の図を見ますと、堀がとてもたくさんあることが分かります。例えば江戸の方から東海道を通り岡崎城に来るとすれば、この図の東側、右の方から来きて籠田総門から城内に入ることになります。そこから街道とは関係なく、本丸まで敵が攻め込んだ時に、一体いくつの堀を渡らなくてはならないのかを見てみます。総堀の通った後、次に外堀を通り、大手門をくぐります。その次に三の丸の堀、東曲輪の堀、二の丸の堀、寺仏堂曲輪の堀、本丸の堀を通ることになりますので、全部で7つの堀を通らないと、本丸に達することはできません。7つの堀で本丸を守っているのは日本史上最多で、厳重に守られてることがこれで良く分かります。元は大変複雑な城内を持っていました。この辺が、非常に長い歴史の中で順番に岡崎城を拡張していった証拠であり、魅力の1つです。

もう1つの特徴があります。資料1頁、左の下をご覧ください。岡崎城の建物の数が書いてありますが、岡崎城はやたらと櫓が多いのです。天守は三重三階の天守でありまして、そこに小天守である二重二階の井戸櫓が付いていました。現在ここまで鉄筋コンクリートで復元されています。その他に、二重櫓が17棟、1階建て平櫓が1棟、長屋の櫓である多門櫓が10棟建っていました。岡崎城は、江戸時代はたったの5万石の大名でした。5万石あたりの譜代大名ですと、大体二重櫓が2つか3つしかないのが標準なのですが、それに対して大名の城郭のように17棟も二重櫓があるというのは普通考えられません。なぜ、多いかと言いますと、前の領主であった田中吉政がどうも櫓が好きで、たくさん建てたようです。そういった歴代の城主の好みも、岡崎城の特徴を順番に決めていったことが分かる訳でございます。

～時代ごとで異なる城の特徴～

徳川家康の城の特徴：本丸が狭く不整形

資料2頁目をご覧ください。城のたくさんある図の中で良く使われる絵図です。この複製版が、天守の中に掛かっているため、皆様も見たことがあるかも知れません。岡崎城の中心部分をこの図で見ると、曲輪（本丸・二の丸・三の丸といった区画のことを曲輪と言います）がやたらと複雑な格好をしています。名古屋城の本丸ではほぼ正方形で簡単ですが、岡崎城の場合ですと、曲輪の形は全て歪み、なんとなく丸いような不整形となっています。それが幾重にも重なった複雑怪奇なものです。江戸時代の日本にあった城の中で最も複雑な曲輪の並び方を持つ城が、この岡崎城なのです。この点を岡崎城の特徴の1つとして自慢していただきたいと思っております。図の右側に解説を書いておきました。まず、家康公がいた時代の城の特色として（この頃の城の特色が残っていることは非常に珍しいです）、本丸が不等辺多角形のような不整形で、しかも本丸の中にある龍城神社という神社だけで本

丸がいっぱいになってしまうほど狭いことが特徴です。家康公がいた時代では、本丸は小さい方が本丸の守備兵が小人数で守れるためよろしいという考え方があったようです。本丸が小さいく形が不整形である点が家康公がいた初期の頃の城の特徴を良く表しています。

徳川家康の城の特徴：狭い空堀

また城の北側の方を見ますと、石垣は殆ど無く、土ばかりでできています。加えて、堀が非常に狭いです。図からも、狭い堀が幾重にもわたっているのが分かると思います。堀が狭いと防備が弱いと思われるかもしれませんが、逆に岡崎城において堀が狭いことは、防備力を非常に高めます。後で詳しく説明しますが、この堀の狭さから、弓矢の為の堀であり、鉄砲の為の堀ではないことが分かります。弓矢の射程距離は頑張って飛ばして 100m 程です。露天であれば 45 度に高く打ち上げて 100m は簡単に飛びますが、三十三間堂の本来の通し矢のように軒の下で飛ばすには殆ど真っ直ぐに飛ばさないと 100m 飛びません。また 100m 弓矢が飛んでも殺傷能力は殆どありません。弓矢の有効射程距離は大体 20~30m 位です。ほぼ真っ直ぐ飛んで来て、殆ど避けることができません。尚かつ、現在の競技用の弓道とは異なり、鏃（矢尻）に、短いですが日本刀と同じ刃で、触ると手が切れる位の鋭い鋼鉄の刃が付いてました。当時の武将達が着ていた鎧兜は大体厚みが 0.5mm 位の鉄板でしたが、軽く切り裂き刺傷させてしまいます。岡崎城の堀の幅は 20~30m 位ですから、堀越しに弓矢で狙われると、いくら鎧兜を着ても間違いなく至命傷を負うことになります。このように非常に厳しい攻め方ができる城でした。皆様は、弓矢なんかより鉄砲の方が良いと思われるかもしれませんが実際の戦闘、特に城攻めの戦闘となると、鉄砲は何の役にも立たないというのが実際の常識であり、城の防備を改めて考え直していただきたいと思うのです。例えば姫路城は弓矢ではなく殆ど鉄砲で防備するようできており、狭間（さま）と言う小さな窓が土塀等にありますが。それらはほぼ全て鉄砲を撃つ為の鉄砲狭間になっています。飛ぶだけだったら 300m 位飛びますが、あつたら敵が大怪我をする鉄砲の有効射程距離は 50~60m です。50~60m 先にいる敵を狙うには良いかもしれませんが、鉄砲は 1 発撃つてしまいますと、2 発目を撃つまでに準備の為 2~3 分間掛かってしまいます。このことは致命的で、2~3 分あったらどんなに足の遅い敵兵でも 100m は走るため、落城してしまいます。一方弓矢の場合、慣れていれば 5 秒か 6 秒に一矢放てますため、鉄砲 1 発撃つてる間に弓矢だったら 20~30 矢放てます。そのため、防備力としては一人の兵士で考えると、鉄砲を撃つ足軽が一人の敵を倒している間に、弓矢であれば 20~30 人の敵を倒せます。このように、この戦国の世は鉄砲主義だと言いますが、城を守る為には弓矢が有効で、鉄砲は役に立たないということを知っていただきたいと思います。家康公時代に造った岡崎城は堀が狭い古めかしい城郭で防備が薄いと思っている方が現在の日本の城の研究者にもいる位多いですが、実は非常に強い城であると思うべきではないでしょうか。

徳川家康の城の特徴：土塁のみ、丸みをもった曲輪

また、曲輪は全て外側が丸くできています。資料の図でも四角い形は無く、丸くなっているのが分かると思います。曲輪の外側が丸いのは全部土でできてるためです。土でできているとなぜ丸いかというと、堀を掘る手間を考慮したものです。というのも、中の面積を最大にして、外側の長さを最小にする形が円であり、同じ面積の正方形と円では、周囲の長さは円の方が大体 1 割短くなります。城に籠城する為には面積の問題ですから、周囲が正方形であろうと円形であろうと同じ面積を確保すれば良いのですが、もし正方形ではなく円形で周囲の長さが 1 割少なくなるとどうなるでしょうか。ま

ず堀を掘るのに1割手間が減ります。それから、外側は敵が攻めて来た時に守るところであるため城兵を配置する必要がありますが、1割外側が短くなれば、守備をする兵力が1割削減できます。例えば四角い城で100人守備の兵力が必要であれば、丸く造ってあれば90人で済むことになります。このように、四角く造るのは愚の骨頂なので丸く造ってあるのです。岡崎城は、非常に有効にできています。丸い形は古い形式で、本丸・二の丸・三の丸というように「丸」が付いている理由として、江戸時代の軍学者は曲輪は丸く造るものだから「丸」が付いているということを言っています。我々は江戸時代の軍学者の言っていることをバカにしていますが、それだけは確かに正しいのです。しかし名古屋城や熊本城の石垣を見てみますと、丸くなくて四角い形ですが、丸い石垣は地震で崩れやすいためです。丸く造っていると地震で揺れた時に石が外に飛び出して隣の石と石との間が広がり、石垣が崩れてしまいます。このように、丸く造ることができないため、真っ直ぐ造ることになり四角い曲輪になってしまいます。したがって、石垣の城は四角く造って、土の城は丸く造るのが有効です。岡崎城の北側の部分には石垣が殆どありませんから、曲輪が丸いのです。土で造った城、石垣ではない城の非常に大事な特徴を持っているということが言えます。

徳川家康の城の特色：丸馬出

それから丸馬出というのも徳川家康の城の特色です。丸馬出は現在残っていませんが岡崎城内には2ヶ所ありました。一番典型的なのが、図の左下にある扇型をした部分です。現在では戦後に新しい川を掘ってしまいこの丸馬出は川に分断され地下に埋もれてしまっています。城門と堀の外側に造った丸馬出は、城門から出撃した兵士を一度溜めておく為、正に馬を出す為の場所という意味で、また丸いため「丸」が付いて、丸馬出と言います。これは家康公が大の得意として造ったものです。丸馬出は元々徳川家のものではなく、武田信玄の武田流築城術のものでしたが、武田家が滅んだ後、武田の家臣の大部分が家康公の家臣になったことから、武田流の築城術は全て徳川家のものになりました。そんな中、丸馬出は武田流の築城術から家康公が取り込んだものでして、家康公が造った城には丸馬出をたくさん使っています。岡崎城にも丸馬出があることから家康公が造ったことが良く分かると思います。当時家康は静岡県の方にいたため配下の武将達に造らせたと思いますが、丸馬出も徳川家康公時代の岡崎城の特徴です。

豊臣系の城の特色：天守背後の狭い空き地

資料2右下には、豊臣系の城の特色として、田中吉政が造った城の特徴を記載していますが、先程申しあげましたように天守を造ることです。秀吉の城はどんな小さな城にも全て天守を造らせました。ただ、この岡崎城の天守は非常に重要な点があります。殆どの方は南側の方から城に登って行くため裏側の構造を全く知らないと思いますが、実は岡崎城の天守は裏側から見た時に重要な特徴があります。是非とも今度、裏側の方、二の丸の方から見ていただきたいのですが、天守の台座の周り、下の所に狭い空き地があります。図で「天守裏の空き地」と記載した部分です。これは、石垣を造る技術があまりなかった非常に古い時代に、下から高い石垣を造るのは難しかったため、下の方に低い石垣を造っておいて、少し引いてから、もう1回天守内に石垣を造っています。要するに二段構えの石垣を造ったためできた空き地です。したがって、非常に古い時代の天守の台座にしかないもので、豊臣大坂城の天守もこれと同じ形があったのですが、現在では殆どこういった例はありません。要するに、豊臣時代の天守の石垣の造り方を良く残しているという意味で、非常に価値があるものなのです。

豊臣系の城の特色：石垣

石垣を造ったのは田中吉政とされます。後世に積み直された部分があり全てが田中の石垣ではありませんが、南の方の水堀沿いの石垣と、大手門周囲の石垣（今地下に埋もれてしまっているため見ません）といった良く目立つところだけの石垣を造り、近世の城郭にしました。

～各時代の特徴をもつ石垣～

横矢の役割

資料の3頁目をご覧ください。これは江戸時代の末の岡崎城の本丸と、本丸の周囲の復元図です。現在では鉄筋コンクリートで復元された天守を除くと建物はありませんが、本丸の周囲は、ずらりと櫓が建っていたとことが分かると思います。ここでは太い矢印で示した横矢というのを見ていただきたいと思います。土塀や櫓から鉄砲や弓矢を射た時にどの方向へ飛ぶかを表現しています。本丸の北側では、二の丸側の方向に矢印がたくさんついています。田中吉政が造った石垣がある南側は、矢印の数が非常に少ないことが分かります。なお、石垣の真正面の方向にも弓や鉄砲を放つことはできませんがそれは横矢と言いませんので、無視して書いていません。敵に対して側面つまり横方向から弓や鉄砲を放つため、「横矢」と言います。横矢は城を守る為に非常に重要なものです。城を攻める時にはどこにでも生えていた近くの竹を切ってきて（戦が始まると竹をどんどん切ってしまうのですが、寺社が境内の竹を切られ困ったようです。かつて関ヶ原の戦いの前に伏見城を西軍の大名が攻めた時、近くにあった竹が全部切られてしまったという記録が残っています。）大体2本～3本位の厚みで束ねた防弾用の楯を作ります。竹は中空になっています。当時の竹は孟宗竹ではなく真竹ですから、いくら太くとも10cm無い位です。約直径の6cm竹を20本くらい並べたものです。竹は軽いため持ち運びできます。このように作った楯を「竹束」と言います。作った竹束を防弾用の楯として持ち、敵に近づいて行きます。敵に近づくことを「しよる」と言います。すると、例えば鉄砲の銃弾の場合、パチンコ玉くらいの大きさの鉛の玉である銃弾は、竹束に当たると1本目の竹は撃ち抜きます。撃ち抜きますが鉛の玉で軟らかいので、竹束を抜けると、真ん丸だった玉は潰れてアメーバのような形になります。そうすると2本目の竹を貫通する能力は無く、2本目で止まります。つまりたった2本の竹で、鉄砲銃弾は止まってしまうので、竹束持っていれば城には簡単に近づけてしまいます。ということは真正面からしか鉄砲を撃てない場所では防御できません。敵の横方向を狙う横矢だけが城を守るのです。だから資料の図では敵の真正面から撃つ場合は無視して、横から狙えるものだけを書いてあります。

徳川時代の石垣

まず、徳川家康が造った方を見てみましょう。図には「徳川時代の横矢」と記載しています。敵は二の丸の方から攻めて来ます。二の丸から「徳川時代の横矢」と書いてある「徳」という字のすぐ横を左の下の方へ通り掛かって行きます。その通路を通ろうとすると、横方向から横矢が掛かります。そこから今度、直角に左に曲がると太鼓門（櫓門）と言う小さな櫓が建っています。そこに向かって行こうとすると、今度は1つ内側の帯曲輪から横方向に横矢が掛かります。太鼓門を抜けて180度向きを変え、今度は右側の方に向かって細長い通路（帯曲輪）を通ります。この帯曲輪を通り本丸の入口の門である表門に至る間、ずっと横矢が掛かります。この部分の横矢が一番強力です。なお、こ

この前の堀は幅が狭いことから、武器は鉄砲ではなく弓矢です。20～30mしか距離がありませんから、この場合弓矢は百発百中です。しかもあたれば、敵は必ず死にますから、必中必殺と言った方が良いでしょう。そういった堀が続く上、帯曲輪は非常に道幅が狭いためあちこち逃げ回ることができません。走り抜けようとしても、走って行く方向はわかりますから、それを見定めて弓矢を射れば、必ずあたります。この長い帯曲輪を突破して、本丸の正門まで辿り着けることは、絶対的に不可能です。しかもこの横矢は二重に掛かっています。私は色々な城の縄張りを見ましたが日本国中探してもこれほど強力な防備がされている城は一切ありません。戦国時代で最強の横矢です。そうして見ますと城造りの名人として例えば加藤清正や藤堂高虎等色々言われていますが、徳川家康時代、造ったのは家康公のおじいさんの松平清康かもしれません。徳川家の造った城の守りは戦国最強あったということが言えますし、その証しが岡崎城の北側のこの横矢の部分にあると思うのです。

田中時代の石垣

それに対して田中吉政が元々土で造った城を石垣に替えた部分を見てみます。石垣に替える時、石垣を一直線ではなく折れ曲げて造っています。折れ曲がりにより、石垣が折れ曲がったところだけ横矢が掛かります。田中吉政の頃の横矢は、鉄砲を主力にしていますから、鉄砲を撃つことになります。そうすると1ヶ所折れ曲がったところから鉄砲を1発か2発撃てます。確かに横矢が掛かるため近づけはしませんが、実際には鉄砲玉が1発2発飛んでくるだけです。何百という軍勢で押し掛けた時、1発か2発の鉄砲ではあたった方が運が悪い位しか思わないですから、(日本の軍学では、石垣を曲げて横方向から鉄砲を撃つと最強の構えと、大体どこの本でも偉そうに書いてありますけれども)これでは実際の戦いでは役に立ちません。そういった意味で考えると、非常に強力だと言われ江戸時代の軍学でもてはやされるような田中吉政以来の豊臣系の造り方というのは、現在の日本の城の分析で考えてみれば、実は家康公の方の時代だった方が遥かに強力だったということが、これからお分かりになるのではないのでしょうか。それだけ岡崎城は価値が高いのです。しかも本丸北側に家康公時代、南側に田中時代と、2つの時代のものが並ぶことから、日本の城の歴史を知る上で非常に重要な城だということが分かります。

譜代大名時代の石垣

加えて、図の一番下を見てください。一番下に見えている水面が菅生川(乙川の岡崎城の前を通っている所だけ菅生川と称すると、うちの父がうるさく言っていましたから菅生川としておきます)です。現在は川の土手のところに、1～2m位石垣が頭を出しています。土で埋もれていたため1～2mの低い石垣かと思っており、私も資料3頁の復元図を作った時はサービスで3m位の石垣に復元しておいたのですが、この前市の教育委員会による発掘調査の結果、高さが5mあることが分かりました。この図では一部しか出ていませんが城の絵図から見ると、全長400mあったことが分かります。高さが5m、全長400m。

400mの間を殆ど真っ直ぐに通っていますが、400mを全て真っ直ぐ通してしまいますと、敵が攻めて来た時に横矢が掛かりません。そこで、資料の図では丁度真ん中の下の1ヶ所、下の方に出っ張りがありますが、横矢を掛ける四角形という意味で、「横矢枱形」と言います。「枱形」はお米を量る枱の形と書き、四角形という意味です。これは江戸軍学で非常に重要なもので、横矢枱形が外に出ることによって、城壁に対して横方向の横矢を掛けるのです。横矢枱形が全部で3ヶ所(図では1ヶ

所しか書いていませんが) 付いていました。

全長 400m にわたり、殆ど真っ直ぐに石垣を通してあること、これは日本の城郭史上類を見ないので、日本一長い石垣称しても良いのではないのでしょうか。普通であれば 400m もあったら途中で大きく折れ曲がったり、間に途中で城門があったり、途切れていたりしますが、岡崎城の菅生川に面する石垣はほぼ真っ直ぐです。加えて3ヶ所少し折れをつけていますが、横矢を掛けるための横矢枅形です。

このように横矢を掛ける為の部分以外は殆ど真っ直ぐに通した日本一の石垣が出土しました。地中に埋もれている石垣を現在市の教育委員会が発掘調査をしており、今日午前中に見て来ました。現在1ヶ所発掘してあります。もう立派な石垣でした。上の方はだいぶ風雪で傷んでいましたが、下の方は地下に埋もれていたため見事に綺麗に残っています。5m の石垣が今日午前中見たところ、1m 位地下に埋もれていましたが、4m 位までの高さが土から出ていました。日本一の石垣がずらりと並んでいます。

この石垣は江戸時代譜代大名の城になってから造った石垣です。このように、岡崎城には3つの時代—徳川時代、豊臣時代、譜代大名時代の石垣があります。

譜代大名の時代に造った、日本一の 400m、高さ 5m もの長さを持ち堂々としている石垣は何の為に付いているのでしょうか。豊臣秀吉の家臣だった田中吉政は、本丸の南正面や天守の台座、大手門の辺り等の目立つところだけ石垣を造り、他の箇所はなにもしませんでした。ところが、岡崎城の正面は東側の方で菅生川に面する側は正面ではありませんが、菅生川の反対側から見た時に岡崎城は良く見えるのです。菅生川の反対側、要するに南正面から見られた時に、徳川家康公の、権現様の誕生の城であるのだから、城が立派に見せる必要がありました。つまり、日本一の石垣が何の為に造られたかと言うと、家康公誕生の城であるから、立派に見せる為、景観の為に造ったのです。

景観の為に造るとなれば、ただ真っ直ぐ並べた石垣を造れば良いのです。例えば、熊本城の 200m の長さ石垣の上に塀が乗っている長塀という造りは、両側に櫓がありますが、一直線に並んでいるだけで防備は全然ありません。しかし、400m と熊本城の2倍の長さがある岡崎城の場合は、3ヶ所ある横矢枅形のうち両側から鉄砲を撃つとすると、横矢枅形間の間は鉄砲の有効射程距離である 50~60m なので、石垣のどこに近づいても横矢枅形から鉄砲で撃たれます。

景観は日本一な上、横矢枅形が非常に的確に出ていて江戸時代の考え方でパーフェクトな城の防備がされている。この石垣を見た他の大名達は、さすが権現様のお城であると感心したことでしょう。

さらに、洪水になったら物凄い量の水量が来るとされる大きな河川である菅生川ですが、その護岸の石垣として築かれていました。大きな川の護岸に石垣を築くと大洪水の時に石垣が崩れてしまうことが多いのですが、昔菅生川は普段水が流れておらず大きな川原、河川敷の中の辺り1本の細長い堤防のようなものが続いており、石垣との間は水路になっていました。要するに菅生川が真ん中で縦に通る堤防によって半分ずつに分かれていました。現代の堤防からは大きいものを想像されるかもしれませんが、その非常に堤防は緩い堤防で、高さが低くて幅だけ広い。多分大洪水になると堤防の上を水が簡単に越えてしまうと思います。現代の治水で考えますと、大洪水により堤防が決壊し、大きな被害となることがありますが、菅生川の河川敷の真ん中であつた堤防は、低くて幅が広い絶対決壊しません。東京の荒川土手に造ったスーパー堤防と言う未完成の堤防がありますが、その考え方と同じです。現代の20世紀(スーパー堤防は20世紀の時に造られました)における土木工学の最新の堤防を、およそ400年前に岡崎城で造ってしまっている。このように水を支配する(治める)と

いう意味である治水の中でも、この石垣は非常に重要なものです。

重要なものが岡崎城にまだまだたくさん眠っています。岡崎城の魅力は数限りなくある、ということがこういったことから良く分かります。

敵が攻めてくるルートと堀の位置

資料4頁目をご覧ください。中心部分の復元図で、太く印したものが江戸時代に建てた建物です。また、普段皆様をご覧になっている岡崎城の図面とは上下逆さまで、下の方が北になっています。家康公がおいでになったときを想定し、かつて正面側であった北の方を下に持ってきました。

このように見ますと、先程説明しました幅の狭い堀が良く分かると思います。この幅の狭い堀を通っていくと、どのように敵が攻めて来るかが良く分かります。少しだけ解説しておきますと、下の二の丸御殿の方から敵が攻めて来ます。まず蛇行した丸い堀である空堀に突きあたり、そのまま上の方に行くと土橋、土橋から右に行くと太鼓門というのがあります。この太鼓門をくぐり抜けて左側に回ると帯曲輪です。帯曲輪と本丸の間にまた空堀がありますが、帯曲輪を左に回って行くと本丸の中に入る本丸の御門があります。ここでは先程、強力な横矢が掛かっていると申し上げました。この辺りが家康公の頃からあったものです。

～岡崎城天守の特徴～

天守腰曲輪と廊下橋

田中吉政が造った天守が、本丸の天守の下、北側と西側に天守腰曲輪という狭い部分があります。この天守の腰曲輪は、先程申し上げましたように、石垣を造る技術がまだ無かったため2段の石垣にしたものです。

天守の下の方に廊下橋という橋があります。現在ではコンクリートの橋が掛かっているだけですが、かつては木の橋が掛かっていて、その木の橋の上に檣が乗っていました。檣の下に橋がついたような形です。天守に廊下橋を付けた例は日本国中1例もありません。日本唯一の構えです。これは天守からの非常脱出口で、本丸に火災等があつて天守から逃げようとした際に、この廊下橋を渡って逃げるためのものです。合戦となった際は、廊下橋は邪魔であるため、多分通れなくしたのではないかと思います。これも岡崎城の1つの特徴です。

田中吉政が造った一代目天守の特徴

資料4頁左上には天守台座の実測図を載せています。これは現在コンクリート製で天守を復元する前に、藤岡先生がお作りになった図面です。天守の台座があり、真ん中に天守の心柱の礎石が1つあり、周りを石垣が囲っています。この天守の台座の左上に「もと付檣か」と書いておきましたが、そこは1ヶ所出っ張っていて、入口がちょっと凹んだところにあります。昔藤岡先生が行った研究によれば、田中吉政が造ったかつて天守は、現在の天守よりも南側が一間（約2m）短かったとしていますが、多分それは正しいと思います。かつての天守は現在よりも南側が2m短くて、資料の図でいうと左上の角が出っ張ったような形の天守だったようです。

そういう天守を田中吉政が造ったとされますから、1590年より少し経った後にできたはずですが、不思議と関ヶ原の戦いの頃に無くなってしまい、家康が岡崎城を取り戻した時には、どうも天守は無

かったようです。その後、元和三年（関ヶ原の戦いから約20年経った後）に再建され明治の初めに取り壊された二代目の天守があり、現在の天守は三代目で、二代目の天守の写真を大体元にして復元したものです。したがって、田中吉政が造った天守は10年位で地上から消えてしまっています。しかし天守は耐用年数が非常に長く、岡崎城クラスの天守では300～400年位保つはずで、10年位で無くなったのは非常におかしい。実は浜松城等東海地方の城の天守は築10年位で殆ど全部無くなっています。未だにその理由となる結論はついておらず多分ですが、慶長元年（1596年）の秀吉による朝鮮出征の時に、朝鮮半島の南岸に20程、たくさんの城を、突貫工事で1～2ヶ月で造っています。しかも全部、天守が建っていました。ひょっとしたら朝鮮半島の南に造った20の城の天守とするために片っ端から解体して持っていったのではないかと、というのが私の今の推論です。そのため岡崎城初代天守は、朝鮮半島で朽ちてしまったのだらうと思われます。東海地方の城の天守はその後殆ど再建されていません。だから浜松城も江戸時代を通じてずっと天守が無かったのですが、岡崎城は権現様のいた城、生まれた城ですから、天守が無い訳にはいけないと、珍しく徳川譜代大名の手によって天守が再建されました。

譜代大名が造った二代目天守の特徴①：石垣

資料の5頁目をご覧ください。元和三年に造られ明治に取り壊された二代目天守、徳川幕府の譜代大名時代の天守の復元図です。現在復元している鉄筋コンクリート製の天守とは若干違いますが、残されている3枚の写真から復元すると図のようになります。

上の図の石垣をまずはご覧ください。天守が建つ台座の石垣は、田中吉政が造った石垣がそのまま使われています。したがって、関ヶ原の戦い以前の天守の台座ですから、現在、日本に残っている天守の台座の石垣としては非常に古く、価値のある例のうちの1つです。ここで見ていただきたいのは、この天守の石垣は少し外側に丸くできている点です。普通の石垣は大体真っ直ぐ造ります。例えば、熊本城の石垣は、扇の勾配と言って、凹曲面で反っています。それに比べ、岡崎城は逆さまで。非常に珍しいのですが、実は、関ヶ原の戦い以前では、天守を支えるような大事な高い石垣は、その造り方でどうも試行錯誤したようです。扇の勾配に沿っていると言われる熊本城の石垣も良く見ると一番下は少し外に向かって膨らんでいます。外に向かって膨らんでいて、少し緩くなってから、最後反っていて、S字カーブになっています。田中吉政の石垣は、全体が膨らんだ形です。その理由として、当時土木工学の技術があまりなかったため良く分からず色々な考え方しましたが、この場合は重たい天守を支えて、石垣を踏ん張らせておくためです。要するに、外に向かって膨らんでいるのではなく、下の方で踏ん張っている形なのです。熊本城もこのように造られ下の方が踏ん張った形の石垣になっています。このように、関ヶ原の戦い以前の、豊臣家大名が色々な石垣の造り方をしたうちの、思考錯誤で造った石垣の1つです。熊本城の扇の勾配の石垣と共に、岡崎城の天守を支える石垣は日本屈指の石垣であると言えます。

譜代大名が造った二代目天守の特徴②：四方に向いた大きな破風

資料5頁上の図の南正面から見た天守をご覧ください。屋根が外側3つ、中が3階建ての三重三階の天守ですが、ここで見ていただきたいのは、南正面真ん中の大きな三角形の破風、「入母屋破風」です。次に下の図の東側の面から見た天守をご覧ください。東側の面にもやはり大きな三角形の破風、「千鳥破風」があります。そうしますと岡崎城天守には、丁度真ん中辺り東西南北の四方に向かって、大

きな三角形の破風が付いていることが分かります。これが実は大事なことです。豊臣時代（田中吉政が造ったとされる一代目）の三重天守からどうも四方に向けて大きな三角形の破風が付いていたであろうということが推定されています。現在残る城の中では、熊本城の昔の天守であった宇土櫓と同じような四方へ向けた三角形の破風が付いています。それから後の時代になって建て直されてしまっていますが、山内一豊が造った高知城天守も付いています。岡崎城の天守は多分、田中吉政が造った天守の形をもう1回建て直したと思いますが、岡崎城の天守、高知の天守、熊本城の古天守（宇土櫓）と、この3つが日本の三重天守の代表例であるとすれば、岡崎城はその1つであると言え、非常に価値が高い形を持っています。

譜代大名が造った二代目天守の特徴③：一番上の屋根についた破風の向き

岡崎城の価値があることがさらに分かるのは、上の図の一番上の屋根のところに付いた三角形の破風です。皆様はこれから天守を見た時に、品格を見ていただきたいと思います。城により正面とする方角は異なりますが、天守を正面から見た時に、一番上の屋根に三角形の破風が見える天守が、天下人の格式を持っている天守です。逆に正面に三角形の破風が向いてない天守は、格式が落ちると思ってください。安土、大坂城、名古屋城、江戸城、といった天下の城は全て三角形の破風は正面を向けてありました。大きい声では言えませんが、国宝の世界遺産である姫路城の破風は横を向いています。

したがって岡崎城は三重天守ですが、正面にわざわざ三角形の破風を見せています。元和三年、江戸時代になり岡崎城天守を再建する時に、権現様の時代には無かったが、権現様の城の天守であったことの象徴として、天下人の天守と同じように正面に三角形の破風を付ける必要があると考え、わざわざそうしたのです。

南正面に三角形の破風を付ける為には、天守の台座を南北側に長くする必要があります。田中吉政が造ったとされる一代目より、二代目の天守の台座では南側に1間、2m 延ばしたとされますが、実は三角形の破風を南側に見せつける為の画策だったようです。そういった意味で岡崎城は、とんでもなく高い品格の天守であるということが分かります。要するに、天下人の天守を正に造り直したのではないのでしょうか。

譜代大名が造った二代目天守の特徴④：破風の構造

現在の天守には、観光客のサービスの為、本当は無かったのですが3階にベランダが付いています。ちょうどそのベランダであまり目立たない二重目の屋根の形が、実は最新鋭なのです。三角形の破風のいただきは、通常であれば真っ直ぐに造りますが、岡崎城天守の破風は物凄く大きいため、真っ直ぐにすると雨仕舞が悪く雨漏りの原因となります。そのため、四方に付いた大きな二重目の三角形の破風が全て天守の本体へ向かって斜めに上げています。四方全てを上げた形の天守は日本唯一で、最新鋭、最先端の建築技術で造っていることが分かります。そういった意味で岡崎城天守の価値は非常に高いことが分かります。

ベランダの他に、現在復元してある天守と昔の天守の違いとして、昔の天守は窓が小さかったということです。現在は観光客へのサービスのために少し大きめの窓が付いています。

徳川家康がいた頃の岡崎城

資料の6頁目をご覧ください。4頁目は江戸時代でしたが、6頁目はその図と同じ方角で作った、

家康公がいた頃の岡崎城の想像図です。これは想像図で学術的な正確さはあまりありませんが、北側辺りに残る石垣を全部除去し天守も無くし、敢えて家康時代の岡崎城を復元すると図のようになります。土でできた戦国時代の城ですが、非常に幅が狭く深い堀で仕切っており、図で下の方から敵が攻めて行くと、堀が幾重もあり中々城に近づけません。反対側である城の南側は菅生川が流れているため、南側からも攻めることができません。このように家康時代の岡崎城は、東海地方屈指の非常に強い城であったことが、この図から少しでも分かっていただければと思います。本日は聞いてくださりましてありがとうございました。

第3部 パネルディスカッション

コーディネーター
瀬口 哲夫 先生

パネリスト
徳川 恒孝 氏
三浦 正幸 氏
内田 康宏



家康公ゆかりの資産を活かしたまちづくりの新たな展開

瀬口先生

瀬口でございます。よろしくお願いいたします。第2部では、講演タイトルには「あなたの知らない？」とありますが、三浦先生から誰も知らないような岡崎城の素晴さを紹介していただきました。本日は徳川宗家の徳川様にもお越しいただいておりますので、「家康公ゆかりの資産を活かしたまちづくりの新たな展開」に関する2つのテーマについて意見交換を行っていきたいと思います。

1つ目のテーマは、岡崎市には鎌倉・室町時代からの良いものが随分色々ありますが、それらを「点から面に繋げる歴史観光戦略」を最初のテーマにさせていただきたいと思っております。2つ目のテーマは、岡崎城跡が近世の城下町として非常に優れたものであるということで、岡崎城跡の見える化について議論していきたいと思います。

先程の三浦先生のお話では、岡崎城は非常に価値があるということでした。私も歴史まちづくりの計画をつくる中で分からないところは随分たくさんありましたが、岡崎城には3期の時代にわたる痕跡が残っていることを非常に分かりやすく説明していただきました。歴史まちづくりの計画は岡崎市全体で歴史都市としての遺産を考えていきたいということで、城だけでなくたくさんある徳川・松平のゆかりの神社仏閣をどう位置付けるかも、重要なポイントだと思います。こういうことについても、本日はお話をいただきたいと思っております。



昨年、1615年に亡くなられた家康公の顕彰四百年祭ということで、私も遠くから眺めておりましたけれども、滝山寺の鬼まつりに徳川宗家様がいらして市長さんと一緒に参加していただいたようです。まず岡崎市での取り組みや印象に残っていること等をお話いただきたいと思います。家康公のネットワークが今年2016年から始まり、その会長も務めていらっしゃいますし、静岡市・浜松市・岡崎市の

3つの都市が、家康公ゆかりの都市として連携をしておりますので、そういうことを含め、最初にお話をいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

～テーマ①：点から面につなげる歴史観光戦略～

徳川氏

第2部の岡崎城の話は、本当にありがとうございました。何となく私は、青年であった家康公が輩出された時代には城は既にできていたと思っていましたが、どうも全く違って天守など無かったというお話を伺い、成る程、世の中というのは知らないことがたくさんあり、先生方に教えていただかないといけないと思いました。本当にありがとうございました。

岡崎市には頻繁に来ますが、その度にこの街がもう少し歴史好きの方達の為になんか上手く惹き付けるものはないだろうかと感じておりました。岡崎城についての今伺ったお話なんかも踏まえながら在り方をもっと少し検討していただくと良いと思います。加えて、日本中に散ってしまいましたが、後に徳川家の大名となった家臣が密集して岡崎城下町に住んでいたそうです。この地から250～300年続いた平和な江戸時代を築いた人達が排出されたという、大きな起点であると言えます。このような歴史を上手く使い、ここに誰がいたのか分かりながら、楽しんで街を歩けるようになると良いと思います。岡崎市の素晴らしさを広めるためにこれからどう進めていくかということについて、今日の先生のお話を伺い、思いを巡らしました。近世城下町岡崎、または東海道の岡崎といったPRを通して、歴女達が群れをなして岡崎市に来てくれると大変ありがたいなと思いました。



瀬口先生

ありがとうございました。「三河武士のやかた家康館」という施設が岡崎城内にありますが、全国に散らばっていった三河武士が岡崎城下町にいたことを意味しています。三河武士達が城下町の何処に住んでいたかが街の中に見えるようにできれば非常に良いのではないのでしょうか。今の徳川様のお話は、第1部事業報告で教育委員会教育部長さんから説明いただいたまちづくりの推進を是非進めてほしい、というような激励かと思います。ありがとうございました。

続きまして、三浦先生。もう45分位時間をあげたいところですが、面白いと思うのは、松平・徳川時代、それ以前の源氏・足利時代から連綿と続く社寺が随分たくさんあることだと思います。ここで三浦先生には、市内に点在する家康公ゆかりの建造物や魅力についてお話をいただきたいと思っています。

三浦先生

岡崎市には古い建築が非常にたくさん残っています。色々ありますが一番古くて立派なのは滝山寺です。この密教本堂は日本屈指で、岡崎市民もあまり知りませんが大変立派なものなのです。

滝山寺は松平家が非常に信仰したお寺ですが、もっと直接松平家と関係がある寺は、信光明寺で、松平家の元の菩提寺です。松平家は浄土宗を執心していて、信光明寺も浄土宗のお寺です。その信光明寺に重要文化財である室町時代の本堂が建っていますが、浄土宗の本堂としましては、日本現存最古の例です。岡崎市民はあまりご存知ないと思います。浄土宗の本山である京都の知恩院には、御影堂と言う建物で浄土宗の開祖の法然上人をお祀りしていますが、本来は本堂がありました。その本



堂の日本現存最古のものが信光明寺です。こちらは唐様という建築様式になっています。(浄土宗と禅宗の2つが唐様を使っています。現在では禅宗の専売特許であることを強調するため唐様ではなく禅宗様と言うんだ、という学者が結構多いですが、私は浄土宗と禅宗の様式であるのに禅宗様と使うのは気に食わないので唐様と言っています。) 浄土宗の日本最古の唐様建築が岡崎市にある。そういった意味で非常に価値が高いと言えます。

しかも信光明寺は松平家の菩提寺です。この信光明寺には唐門という、松平家の墓ところに入る為の表門があります。唐門は文化財になっていませんが、実は非常に良いものです。大部分は空襲で焼けてしまいましたが、二代将軍徳川秀忠公の廟所である台徳院霊廟が東京都港区芝公園にある増上寺に作られました。台徳院霊廟には惣門という非常に独特な造られ方がしてある門があるのですが、瓜二つでできているのが、実は信光明寺の唐門で、もちろん、幕府が造っています。このように徳川家の非常に重要な建物が信光明寺にあります。

それから三代将軍家光公は、おじいさんであった家康公を非常に尊敬しておりまして、日本各地に家康公の事績を求め、大事な寺や宮を非常に保護しています。岡崎市は家康公の生誕の地であることから、家康公にゆかりのある重要な寺や宮が非常にたくさんありました。例えば伊賀八幡宮(家康公に重要でゆかりがある伊賀の人達が造ったので伊賀八幡宮と言います)の社殿と、東岡崎駅のすぐ近くにある六所神社の2つを立派に造り直しました。建築様式は日光東照宮をひと回り小型にした形、権現造りで両方とも造っています。さらに滝山寺は家康公に非常に縁があったため、滝山東照宮という建物を造っています。このように岡崎市内には徳川三代将軍の家光公が、家康公を顕彰する為に造った多くの建物があり、家光公がお造りになった建物の数だけ数えれば、多分、岡崎市が日光に次いで2番目に多いのではないかと思います。

その他、本多平八郎ゆかりの西岸寺というお寺があります。西岸寺には赤門という非常に良い門があります。それは戦災で焼け残っており、この前見に行きましたが驚くほどです。ただし、文化財にはなっていません。もったいないです。そういった未指定のものがたくさんあります。

その他、家康の父であった松平広忠公の廟所である、松應寺というお寺があります。歴代の徳川将軍ではなくて、もう1つ前の祖先にですので、廟所は結構質素に造ってありますが、幕府の助力で造



っていますから、それなりの立派さがあります。現在では土堀がだいぶ崩れ落ちてしまっていますが日本屈指の古い時代の大領主のお墓の形を残しているという点で非常に重要だと思います。

その他にも岡崎市内には松平家・徳川家関係の大事なものがたくさん残っており、その点で非常に重要な市と言えます。例えば、大樹寺は徳川家康公の御遺命により、歴代将軍の御位牌を立ててるところから分かるように、徳川将軍家の一番大事な菩提寺です。東京都港区にある増上寺と、岡崎市にある大樹寺は日本を代表する将軍家のお寺なのです。その辺は、良くないことに、日本全国の市民が殆ど知りません。もっと良く岡崎市を知っていただく為にも、そういった徳川家関係の寺・宮のことを広く知っていただく必要があるのではないのでしょうか。

瀬口先生

はい、ありがとうございました。岡崎市内には文化財に指定していない神社仏閣が随分あります。私も岡崎市内に住んでいて、近くに陣屋等の古い建物があるのですが、市の人に話をしたところ、岡崎市には江戸時代の陣屋位の建物はたくさんあり手が回らないと言われたことがあります。そういった文化財に指定してされていないものを歴史まちづくりの中でどう位置付けていくかがポイントだと思います。文化財に指定してされているものであれば、文化財としての対応はできますが、そうでない、先程話に出ました西岸寺や松應寺の土堀等も随分傷んでいるようです。どういう形で継承するか、という辺りを含めて、歴史まちづくりを進めるべきではないか、という議論をこれまで皆さんからいただいたような気がします。

そこで市長さんの方から、岡崎城跡やその周辺の見える化、あるいは、要望が多い市内の中に点在している神社仏閣のネットワーク化辺りの方針を市長さんからお伺いできたらと思いますが、いかがでしょうか。

内田市長

本日は本当に大勢の皆様方においでいただきまして、ありがとうございました。岡崎市・西三河は、戦前戦後ものづくりで栄えて来たところでありますけれども、よそのまちにはない、今お話いただきましたような素晴らしい歴史的な文化資産がたくさんあります。我々地元の間でも、まだ分かってないところがありますが、こうしたものを中核に置き、しっかりと我々自身が学んでアピールすることによって、観光産業を、1つの経済の柱にしていきたいと考えております。これは、私が最初の選挙以来ずっと言い続けてきていることとさせていただきます。まだ端緒に着いたばかりではございますが、旧来の伝統的な物をしっかり掘り起こしてまいります。それ以外に新しいことも進めていきたいと思い、現在色々行っております。



しかし、観光として岡崎市をPRしていく中で、一番メインとなるのは、先程からお話いただいている岡崎城です。そして、岡崎城に並ぶものが大樹寺だと思っております。大樹寺には、歴代の将軍の位牌堂がございまして、十四代の将軍の背丈と同じ位牌があります。市外からお客さんが来た時には必ず大樹寺に連れて行きますが、東京からお見えになった方等は位牌堂の中を見て、口では言いませんが、どうしてこんな田舎にこんなものがあるのか、といった顔をされます。このように、素晴らしいものが岡崎市にはあるのですから、こういうも

のをしっかりアピールしていきたいと思っております。

そして大樹寺にはもう1つ、岡崎市民が誇るものがございます。それは家康公の孫でありました家光公により、お寺のお堂の門からいつも岡崎城が確認できるよう、通しでお城が見えるような配慮をした造りとなっています。地元では「ビスタライン」と名前を付けて呼んでいます。岡崎市の住民が400年近く守り続けたものですが、これは私達の誇りの1つであると思えます。こうしたものをしっかりアピールしていきたいと思っております。

岡崎市には歴史があるということは、よく自慢しますが、観光に関しては、「興味がある人はどうぞ来て、勝手に見てってください」というようなところがございます。この問題は岡崎市だけでなく、名古屋市が一番行きたくないまちのNo.1になっているように、愛知県人には自分達が分かっているれば良いというところがありますが、それでは良くないと思えます。観光産業としてお客さんにサービスする為に、バスが駐車できずに観光できないようでは、観光産業とは言えないと思えます。京都等では小さなお寺でも観光バスが巡回して駐車できますように、そういったシステムを考えなければいけないと思えます。大樹寺は既に、私が市長に最初に当選したすぐ後から、駐車場の用地も考えていました。現在、大体話がまとまりつつありますので、間もなく駐車場設置に向けての工事が始まると思えます。

そして、現在、岡崎市が積極的にアピールしておりますのは、家康公の像でございます。市民の皆様方から本当に多くの浄財をいただいており、寄付でつくろうとしています。徳川家康公というと、狸おやじ、策謀家で悪いことしていたようなイメージがある（「真田丸（2016年NHK大河ドラマ）」を見ていてきっと家康公に関係のある方は苛々すると思えます）のですが、実は家康公は本当に苦難の歴史を生き抜いて来た方です。桶狭間の戦いで敗れて帰ってきたのが19歳、徳川家康と改名したのが25歳です。29歳まで岡崎市にいたのですが、岡崎市民としてはその頃の若かりし日の家康公の姿を再現して、ヤング家康を売り出していきたいと思っております。現在若き家康公の像を作りたいと、募金を市民に呼びかけましたところ、この春始めたばかりですが、かなりの額が集まっています。あまり金額を言うなと言われていますが、作成費は7,000万円位です。ただ日本でもNo.1の方、神部峰男先生に作成をお願いしております。その業界の方にお聞きすると、これ1億か2億掛かるんでしょうということを聞かれますが、大変岡崎市民にとっての意義を感じていただき、その値段でやっていただいております。このままいくと募金だけで像ができそうでございます。こちらの方もまた、よろしくお願い申し上げます。新たなる岡崎のシンボルの像は東岡崎を出てすぐ近くにできる予定です。

東岡崎から川沿いを歩くと、現在賛否両論ございます人道橋にあたります。この人道橋が建設されると想定し、渡っていただきますと、中央緑道がございまして、そこにはセントラルアベニューというものを整備します。セントラルアベニューには岡崎市の伝統産業である石工業の技を活かした四天王の石像を置きたいと思っております。岡崎市の石屋さんからはいつも「俺達は腕は日本一だが、仕事が無い」と言われます。今回、素晴らしい仕事、プロが見てもため息の出るような四天王の石像を作ってくださいと、お願いしましたので、現在、素晴らしい石像ができつつあります。



しかし、徳川四天王の像を作って並べるだけで、終わりではもちろんごさいません。それをいかにアピールしていくか、そして、整備した空間を使っていかに市民、市外の方に楽しんでいただけるようなソフト事業一番大事だと思っています。四天王を一つずつ説明していると時間が掛かってしまいますので、1つだけ、本多平八郎公の像について説明します。製作過程を見てまいりましたが、本当に石屋さんが顔も残っている資料を元に忠実に、真剣に作っています。フィレンツェにあるダビデの像の顔のように、きちんとした素晴らしい像ができておりますので、是非、ご期待いただきたいと思っております。

それから、市内に点在する観光資源を活かして観光産業を推進していくためには、交通手段の確保、どなたにも分かりやすい観光案内、各拠点における駐車場とトイレの設置、これらが大事だと思っております。1つ1つ検証しながら、順番に整備をしていきたいと思っております。

そして岡崎市の歴史と文化資産が分かりやすくストーリーとして理解いただけるように、京都のように、市民が岡崎市の歴史等を一番最初に理解していただいて、場合によっては市民皆様一人ひとりが市外からの来訪者にお話ができるような、そんなまちになれば素晴らしいと思っております。

加えて、岡崎市ならではのお土産と美味しい食べ物も必要だと思っています。これらについても、昨年の徳川家康公四百年祭、今年の岡崎市制百周年記念の事業を通し、岡崎市内のレストラン・料亭の皆様方から大変ご協力をいただきながら様々な試行錯誤をし、担当部局も一生懸命知恵を絞っております。

今日は私、徳川様にご了解も得ずに勝手に葵の紋を使ったネクタイピンをしておりますが、こういった物もお土産として売り出していきたいと思っております。こうした取り組みが全て整った時に、観光産業都市としての岡崎市が実るのではないかと考えております。私が生きているうちに完成するかどうか分かりませんが、将来の岡崎市民が、あの当時の市政が頑張ってくれたお陰で、ものづくりと観光産業で栄える今の岡崎市がある、とっていただけるような仕事をこれからしっかり行っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

瀬口先生

はい、ありがとうございます。今人道橋と話にありましたが、その途中には籠田総門もあります。そのような歴史的な資産をたどると岡崎城の総堀の方に繋がって行く訳ですから、それら上手に整備すれば、観光の拠点になるのではないかと、というようお話であったと思います。



また、観光の拠点となるために、交通手段の確保が必要であるとのことでした。例えば鎌倉・室町の社寺分布を考えると、丘陵部、岡崎市の環状道路の外側に多く、環状道路からのびる道路沿いに社寺があります。そのため、観光案内は道路の体系に合わせた案内への配慮が必要そうです。各拠点での駐車場とトイレの整備、というお話がありましたが、そういった場所に案内板を設け、近隣の社寺へアクセスできるようにするといった整備等により、全体的に歴史的風致が向上していくのではないのでしょうか。

先程、三浦先生がおっしゃったように、岡崎市の社寺は、全て松平家と徳川家にゆかりがあります。不思議なことに、後から来た人も昔の人を足蹴にせず、先人を大切にしています。例えば、足利の将

軍の建てた建物である天恩寺でも家康公の逸話があるように、歴史を受け入れ、継続しています。観光を推進していくにあたり、先程三浦先生の話にあったように、岡崎城郭は徳川家康がいた時代だけでなく、鎌倉・室町時代以降の日本の武家文化が分かる文化財が、非常に集中している場所ですので、それらを是非見える化していけたら良いのではないのでしょうか。先程市長さんから生きているうちに完成するかどうか分かりませんが、とありましたが、次世代に繋がっていくような仕組みづくり、市長さんが交替しても歴史まちづくりは変わらず進む条例のようなものを是非考えていただけると良いと思います。

～テーマ②：岡崎城跡（総構えの見える化）～

瀬口先生

2番目のテーマ、「岡崎城跡（総構えの見える化）」に移ります。基調講演でも、岡崎城跡は非常に素晴らしい城跡であるというお話がありました。城下町の中でなんとなく行ってみたい城下町というのがありますが、岡崎城下町も多分、その1つであったと思います。外堀や総構えがあったとても素敵な城下町を、見える化していくことについて、ご意見をいただけたらと思います。まず三浦先生からアドバイスをお願いします。

三浦先生

「三河武士のやかた家康館」が現在ある二の丸の正面に、割と新しく造られた城門があります。今でも呼んでいるかどうかは知りませんが、造った当時は大手門と呼んでいました。しかし、大手門は本来、二の丸の正門ではなく、外堀の正門に造るものなのです。二の丸の正面に大手門を造ったために、総構えは城下町を囲んでいます。その場所が、岡崎城の一番外側を意味するようになります。総構えを除外して外堀を基準に考えて大手門と命名されたことは、本来はもっと大きいはずの岡崎城郭を10分の1に狭めてしまう行為だったのです。大手門という名前はよろしくありませんが、岡崎城が日本で4番目に大きい超巨大城郭であったこと、どこまで岡崎城で、どこに外堀が通っているかということを知らなかったために、二の丸の正門を大手門と命名してしまったのだと思います。これは、担当した職員が悪いのではなく、それを明らかにしておかなかった研究者の怠慢が悪いと、私はまだそこまで関係していませんでしたけれども、同業者としてお詫びしておかなければいけないと思います。



岡崎城は日本屈指の大城郭であったのに、現状は岡崎公園に収まる位の小さな城としか思われていません。それがそもそもおかしいのです。かつての城郭の範囲、規模、それから籠田総門のある総堀から本丸までは7つの堀を越えなければ辿り着けないという複雑な構造、というようなところまで全て、岡崎市民は当然知っていただかなくてははいけませんし、市外からの観光客にも味わっていただかなくてははいけないと思います。そういった意味で、岡崎城の全体、総構えの見える化、要するに、総

構えの内側の城の構造を全部見えるようにすることは非常に大事なことでないでしょうか。それが全部見えるようになった時に、岡崎城の進化というのが良く分かると思うのです。

見える化については色々やり方があると思います。田中吉政が造った石垣は地面の下に埋もれているものが結構あるので掘ればどこでも出てくるとは思いますが、現在市街地となっている地面の下ですから、そう簡単に掘れません。何年か前に吉政が造った石垣が 100m 以上に渡って出てきて、あれには驚きました。100m 以上もの長さの豊臣時代の石垣でが出た例は一例も無いのです。しかし、惜まれることに、また地下に戻されてしまいました。石垣の上にある建物はコンクリート製で 100 年保ちませんから、石垣は 100 年以内にはまた地上に出てくるのではないかと思います。そのように、地下に埋もれている遺構は掘れるところから掘って出せばよろしいし、掘れないところは掘れないなりに案内板やモニュメント造る等して、大手門や堀等、岡崎城の各部分がどこにあったかを検証するのは 1 つ大事なことです。

一番手っ取り早く見える化できそうなのは、菅生川のほとりに出てきた、長さ 400m の日本一の石垣です。河川工事の問題がありますので、直ちに全部掘って出す訳にはいかないかもしれませんが、もう少し見えるようになりましたら、岡崎城の潜在的価値がもっと上がるだろうと思います。



このように、やり方を考えれば、岡崎城は色々なところで見えてきます。かつての大城郭、要するに家康公が天下を取る元となった城の大きさ、力強さを分かってもらえるようになるのでしょうか。その為に、必要に応じて櫓や城門等を復元することは有効な価値がありますが、でたらめなものを造るよりも歴史的事実に忠実に造った方が良いと思いますから、しっかりと本物が分かるところを選んで復元すべきなら復元すること、費用対効果も考えて的確に造っていくことが大事だと思います。

瀬口先生

はい、ありがとうございました。今お話にありました、大手門の名称に関して、私も少し反省しなければいけないことがあります。大手門の再建は、20 年程前に「愛知のふるさとづくり事業」で岡崎市が提案したものです。私はその時、「愛知のふるさとづくり事業」の審査員の一人で、岡崎城の風致が向上する面白い取り組みではないかと賛成し、予算がつけられ、実現したものです。それなりに岡崎城の風致向上に貢献したと思いますが、今から見ると史実に忠実ではなく、市民に誤解を与えているということで、時代が変わったなと感じます。

すぐ取り組める見える化は名称をつけることです。本来あったところの名称としたり、現在公園になっている城郭を少し見える化したりすることができると思います。また、先程石垣が治水の役割を果たしたというお話がありましたが、現在の石垣のところに関して、洪水の力を弱めるような工夫をしつつ見える化してはどうでしょ



うか。全長 400m の石垣と、その後ろにある岡崎城の天守の姿を是非拝見したいと、多分皆さんも思っているのではないかと思いますので、100 年経たない内に実現してほしいと思います。

そういうことで、見える化の実現に向けてますます期待が掛かると思いますが、市長さんの方から史跡整備等を含めて、お話いただけたらと思います。

内田市長

今、三浦先生からありました通り、史実に基づいた整備が第一だと思っております。本物でない長く皆様方の評価いただけないと思っています。そして同時に、市民や市外の来訪者の方に楽しくお城やその歴史を体感していただけるような整備をしていきたいと思っています。

現在、岡崎市は市街化の整備と、河川空間の整備を合わせた「乙川リバーフロント計画」という事業を進めていますが、その経緯の中で、先程お話にありました、菅生川端石垣が出てきたのです。しかし河川法等の法律があり石垣を再現するのは難しいとのことでした。先般、知事の元へ、このような貴重な石垣が出たので一部でも残せるようにご協力いただきたい、と言いにいきましたところ、知事からは、そのような貴重なものはできる限り残して再現しなければいけない、と言っていただきました。お世辞で言われただけかと思っていたら、石垣を全て又は半分掘り返して残すとしたら、どれほどの費用かを調べて教えてほしい、という声が、知事から担当部局へ掛かっているということを知り、大変心強く思っています。全長 400m を全て再現することは、法律的な問題もあり難しいかもしれませんが、できる限り皆様方に、目で見確認していただけるようなものを造っていきたく思っております。



そしてまた、次の市長さんがきつとやることになると思いますけれども、岡崎城も後 10 年、15 年経つと今の岡崎城をどうするかという、名古屋城と同じような問題が起きてくると思います。三浦先生にご意見をお聞きしますと、400 年保つ木造で造るべきだという言葉がすぐ返って来ますが、木造の岡崎城を造る為には今ひとつ、岡崎市に資料が足りないのです。三浦先生は数枚の写真が残っていれば、それでできるとおっしゃられます。岡崎市は大変古い土地で旧家がたくさんございますが、皆様方の中にも、お宅に蔵や倉庫がございましたら、一度調べていただくと、古い昔の岡崎城の写真や、ひょっとしたら見取り図なんか壺の中からでてくるかもしれません。一度ご確認いただきたいと思います。かつて、四国にある高松城も、市から市民に訴えかけるという同じ試みを行ったところ、古い写真がでてきて、それがお城の再建に弾みが付いたということを知っています。また、イギリスの方でも古い写真の発見により再建に繋がった例があるということも聞いております。岡崎市民、市外の皆様へ、もし写真の収集等好きな方がございましたら、岡崎城の古写真や古絵図が無いからお尋ねいただきたいと思っています。

そして先程の観光についての話の補足ですが、観光となれば、外国人もこれからたくさん来ることと思います。整備した施設等を観光案内人にご紹介いただきながら、正しい知識を持って帰っていた

だきたいと思いますが、四六時中その場に案内人がいる訳にはいきません。既に姫路城や名古屋城等で行われていますが、スマートフォンをかざすと解説が多言語化されるアプリ等がありますので、重要な観光資産については、そのような対応も考えていきたいと思っています。

先程お話ししたリバーフロント計画の中で、1つだけ言い訳をさせていただきたいと思っています。今の市長は新しい橋を造るのに100億掛けるがそれで良いのか、ということを経験でもアピールした方々がお見えになりますが、これはとんだ誤解です。全く別の事業である駅前再開発事業に乙川リバーフロント計画事業に上乗せした総額が99億7,000万円という大きな金額になって、俗に100億と言われる訳です。しかし実際は、駅前再開発事業、中心市街地再開発、乙川リバーフロント計画事業（乙川の河川空間の整備）、岡崎城跡周囲の整備、これら全てを含めた金額が99億7,000万円です。新しい橋を造るだけであれば、岩盤の補強工事も含めて21億円でできます。もし、橋を造るだけで100億円を掛けるという声を聞きましたら、それは違う、橋は21億円でできる、とっていただきたいと思っています。



そして一番肝心なことは、今回、岡崎が進めている事業はただ観光PRをする為だけではなくて、大変意義のある、国のモデルケースになりうる事業であるということです。事業の総額の半分近くを国から補助金でいただいています。私達も国のモデルケースとなる為に大変努力していますが、東日本大震災や熊本の地震を受け、国のお金が大きく動く中で、地方の一振興事業にそんなに大きな補助金をいただくというのは、本当に稀なケースです。国土交通省に行く度に毎回、恩着せがましいと言われてしまいますが、

それだけ努力をしているということだけご理解いただきたいと思っています。余計なことを言いまして申し訳ありません。

瀬口先生

はい、ありがとうございました。大村県知事さんにも協力いただきながら、お金が掛けられるところだけ整備し、整備できないところは壊さないよう未来の為に残すことが多分、歴史まちづくりの根幹だと思います。お金が掛けられるところだけ整備して、それ以外は壊してしまうと未来に残りません。その辺を心掛けていただければ、多分、市民の皆さんも随分納得していただけますし、整備することが観光だけでなく、岡崎市民の誇りになっていくと思われま。

それでは徳川宗家さんに、これまでの話を色々お聞きになって、松平八代、徳川家の日本国中ここのしかないふるさとである岡崎市に向けて、エールを先程送っていただきましたが、もう1つお言葉や感想をお願いしたいと思います。

徳川氏

これまでの話を承って、対女性政策が、とても大事なのではないかと思います。この視点がまだ少し堅い印象を正直受けました。「歴女」という歴史大好きな女性が日本中に山のようにいらっしゃいます。関ヶ原の何百年かで行きました時、圧倒的な女性達が圧倒的にアンチ徳川で、非常に寂しい想いをしましたが、あちらこちらで、歴史好きの若い高校生や会社に入りたて位の人が、集団で来て

いたり、一人で研究している方もいました。もう1つ岡崎市がこれから伸びていく時には、真面目すぎるよりも、ヤングガールズを惹き付けるような魅力が加わると、とても良いのではないかと思います。



大坂城が落城した時に亡くなった方達の慰霊祭に、私と真田さんと2人で出ました。そこにもたくさんの女性達がありました。全て行事が終わった後、私と真田さんが外へ出たところ、真田さんのところには怒濤の如き女性が集まった一方、私のところには男の人が2人位来ただけでした。やはり凄い人気であると思つづく思いました。今日お話を伺いながら、家康公の他に徳川家臣団の中に、とても華やかで元気が良く、女性にもてる侍、ヤングガールズの心を掴むような良いお武家様はいなかったかと考えていました

たが、これは良いのではないかと思うたくさんの武将が頭に浮かびます。そういった武将達をうまくPRに活かしてはどうでしょうか。家臣団もそれを願っていると思いますので、お考えいただきたいと思います。

瀬口先生

井伊直政の石像はイケメンです。なかなか良い、ありがたい助言をいただいたと思います。男性が中心となつてつくった計画や整備は固い印象のものですが、先程市長さんのお話にあったソフト面の政策で女性が中心となる視点で考えていただきたいと思います。カワイイという印象を考慮した家康公や、色んなキャラクターの人がいるだろう徳川家臣団の人間性が、見えるような工夫をしながらPRすることで、日本人の歴史がこの岡崎市から始まっていることが見えてくるのではないか、という助言であったと思います。ありがとうございました。後なにか言い残したことはありませんか。

三浦先生

岡崎市は日本の歴史なのです。特に江戸時代の歴史が始まったのは岡崎市からです。つまり、江戸時代には日本全国に大名衆がいましたが、その祖先の70%は愛知県出身で、その内大多数は家康公の家臣でしたから、なにかしら岡崎市に関係のある人です。そういった意味で、徳川250年の江戸時代は、岡崎市が元になって生まれたと言っても過言ではありません。加えて、たくさんの歴史的な財産を持っているのですから、岡崎市はもっと知名度を上げるべきですし、広く皆さんに知っていただくことは大事です。



そのように考えますと、岡崎城を検証するための力は非常に重要になってきますから、これから期待されるのは市長さんです。

内田市長

先程の徳川様のお話を聞いて分かるように、「真田丸（2016年 NHK 大河ドラマ）」を見ていてきっと岡崎市民や家康公に関係のある方は苛々すると思います。豊臣家の真田は真面目で誠実で、豊臣に忠義を尽くしたと言われていますが、徳川が天下を取るまでの経緯をみれば決してそんなことはなかったことが分かります。皆、損得や自分達がいかに生き残るかということを頭に戦ってきて、最後に徳川が勝ってしまったために、強い巨人が嫌われるのと同じように、悪口を言われているのです。

徳川が天下を取れた理由は、それを支えた三河武士団の愚直さにあると私は思います。三河武士団の中で裏切り者は余りいないんです。そういった愚直さが徳川を支え、最後の天下統一まで辿り着いたと私は思っています。そういった三河武士団についてもこれから合わせてアピールしていきたいと思っております。

瀬口先生

はい、ありがとうございました。では徳川様から何か一言ありますでしょうか。

徳川氏

今、市長さんがおっしゃった通りだと思います。家康公の四百年祭の時に、静岡で徳川家臣団の方が集まることになったのですが、400人近い方が集まり、お一人おひとりが私の前に来られて、私はだれが先祖であったかや、いつどんなお役に就いていたか等を3時間半位伺いました。何と返したら良いのか分からないもので、その節はどうも、なんて言いながら、その節で良いのかと思ったりしながらお話を伺いましたが、皆様本当に手を握って離さず喜んでくださりました。また、あちらこちらから、先祖が関係あったといったお手紙をよくいただきます。このように、家臣団の中心となる方や歴史好きの方がまだまだたくさんいらっしゃいます。そういった方を上手く引き付けるためにどうされるかというのが、岡崎市の歴史をPRしていくキーポイントとして、市長さんの腕の見せどころなのだと思います。僕にできることがあればお手伝いしたいと思っています。皆様も是非、このまちの良さや歴史の強さを知っていただき、広まると良いと思っております。



瀬口先生

はい、ありがとうございました。これまでお話を伺って言えることは、1つは、本シンポジウム開催の午前中には岡崎城跡を見学する催しがありましたが、今まで整合性があまりなかった（都市計画分野の）公営行政と文化財行政を、今後は連携を密にした体制としていくということだと思います。

それから、城跡だけでなく岡崎市内に広域的に分布している社寺は文化財に登録されていないものも含めて非常に価値が高いため、それらを家康公の顕彰という名前を被せて光を当てながら、市域全体の歴史的風致を向上していくことが大切であるという点です。

また、こういった取り組みは観光にも繋がるし、市民の誇りにも繋がると思います。岡崎市の文化は、岡崎市だけの文化ではなく、日本の文化に実は繋がっているという話を伺いました。ですので、

岡崎市民の誇りという以上に、日本人の誇りになるようなまちづくりにしてほしいと思います。

そうすると時間が掛かりますが、市長さんも 100 年は続けていられないので、市民と一緒にって取り組み、世代を超えた体制を行政と市民が協力して作っていくことが大切だと思います。これまで 300~400 年掛かって岡崎城の歴史ができていますから、これから 300~400 年掛けて愚直に進めていってはどうかということだと思います。徳川様からまとめをお願いしたいと思います。

徳川氏

私は岡崎市で家康公作文コンクールを 9 年近く行っており、多い時は 1000 人位の小中学生から、家康公についての作文を投稿してもらいました。毎年大樹寺で表彰式が行われます。子ども達が書いてる家康公の作文は、本当に素晴らしいです。「僕も家康公みたいに頑張って、野球のバットをちゃんと振れるようになりたい」等、色んな子ども達の夢と家康公が混ざって書かれています。今まで随分貯まった作文を本にして出したら、どうかかなと思ったりもしています。

瀬口先生

はい、ありがとうございます。女性や未来を担う子どもからの視点を忘れてはいけないというお話をいただいたと思います。

本日のお話は、岡崎市は日本文化の元であるということで、本物志向を目指しながら、歴史まちづくりを愚直に進めていただきたいというお話だったと思います。

それではこれもちまして、第 3 部パネルディスカッションを終了させていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。

閉幕あいさつ

岡崎市長 内田 康宏



最後にお礼のご挨拶を申し上げたいと思います。本日は本当に長い間「歴史まちづくりシンポジウム」にご参加をいただきましてありがとうございました。そして徳川様、三浦先生、瀬口先生、それぞれのお立場から岡崎市のまちづくりに向けた貴重なお言葉をいただきまして、感謝を申し上げる次第であります。

岡崎市の歴史まちづくりにつきまして、様々なお言葉をいただきました。徳川様からは、三河武士の姿と近世城下町、岡崎市としての整備のあり方、そして若い女性を対象とした施策、といったお言葉をいただきました。また、瀬口先生からは、鎌倉・室町の時代の歴史を活かして、残すものはきちんと残していくべきであると、といったお言葉をいただきました。三浦先生からは数多くいただきましたが、文化財でない寺社もしっかりと活かしていくべきであること、歴史的な史実に基づいた本物志向とすること、といったお言葉をいただきました。このようにいただいた的確なお言葉をしっかり胸に留めまして、これからの岡崎市のまちづくりに取り組んでまいりたいと思っております。

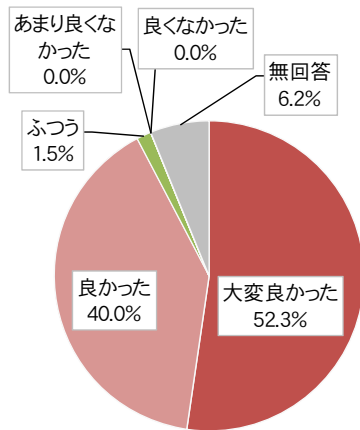
特に一番大事なことは、私が市政を担当している時だけ実施されて、その後取り組みが終了してしまうのではなく、岡崎市民や子ども達がその意思を引き継いで、岡崎市の歴史を大切にしまちづくりを進めていっていただくことではないかと思っております。

そして、岡崎市に生まれた子ども達が岡崎市に生まれたことに、より大きな誇りと愛情を持てるような、そんな夢のある新しい岡崎づくりに向けまして、これからも頑張っていきたいと思っておりますので、皆様方も変わらぬお力添えをお願い申し上げまして、お礼のご挨拶に代えさせていただきますと思っております。本日は本当にありがとうございました。

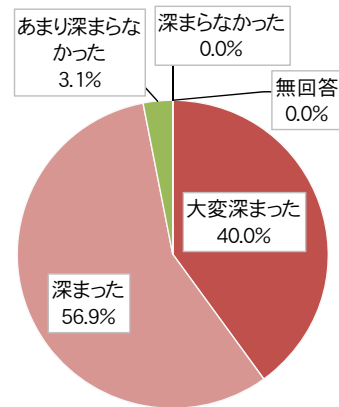
アンケート集計結果

シンポジウムには、172 名の方にご参加いただきました。その際実施されたアンケートには、68 名の方にご協力をいただき、歴史まちづくりに関するご意見をいただきました。

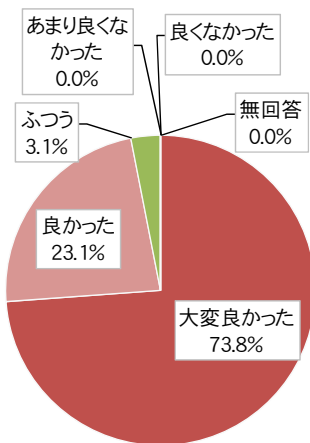
Q1 今回のシンポジウム全体の内容はいかがでしたか？



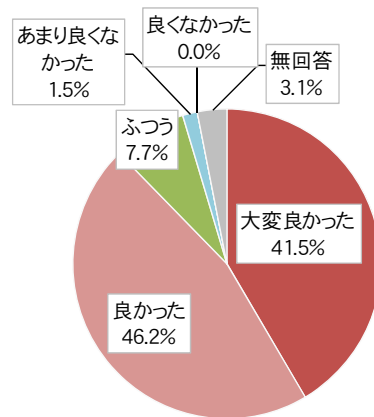
Q2 本日のシンポジウムで歴史まちづくりへの関心や理解は深まりましたか？



Q3 三浦 正幸 氏の基調講演はいかがでしたか？



Q4 パネルディスカッションはいかがでしたか？



Q5

今回のシンポジウムへのご感想や、今後の歴史文化資産を活かしたまちづくりへのご意見等がありましたら、ぜひお聞かせください。

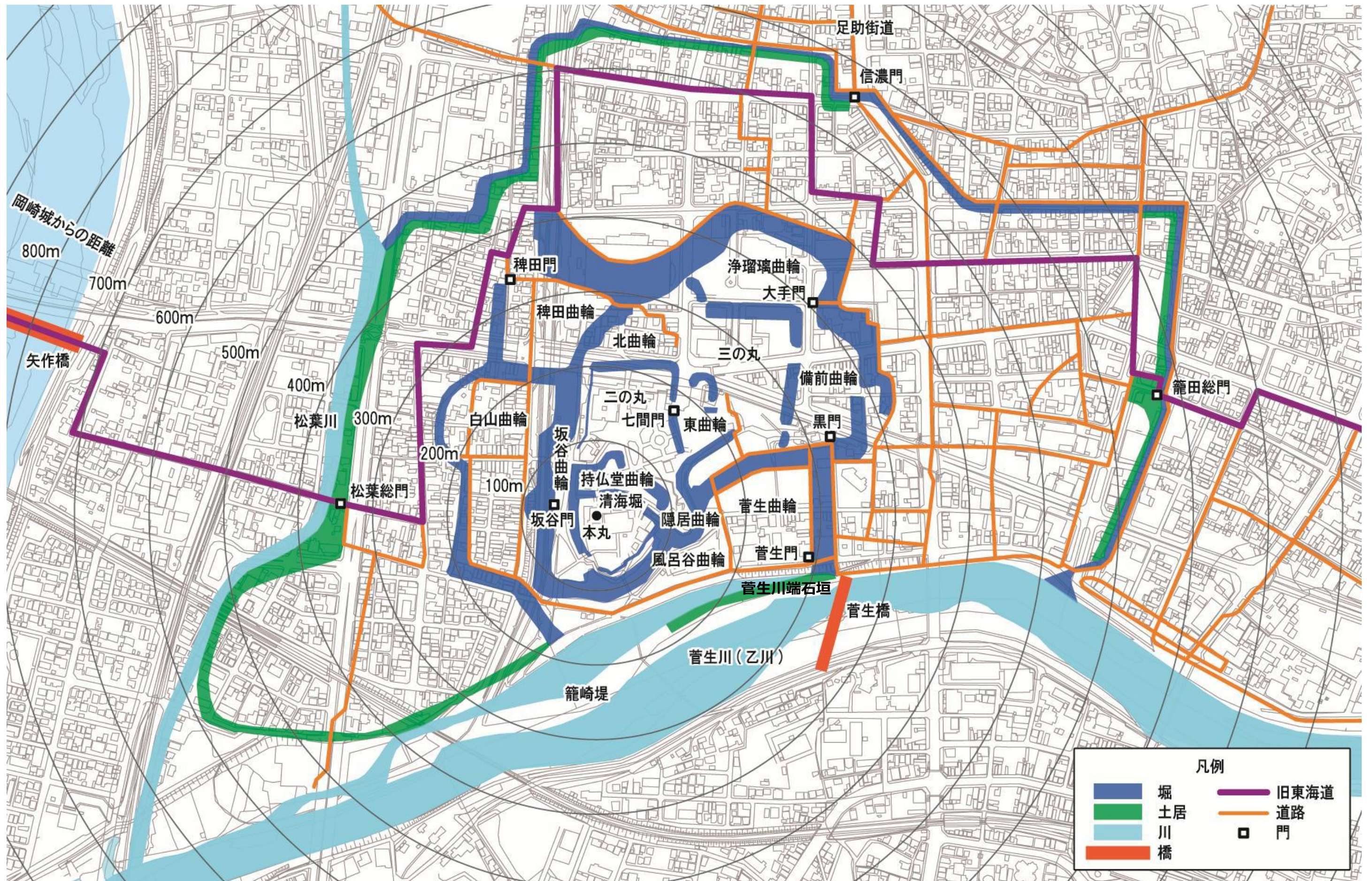
- ・家康公のゆかりの地としての案内板や石碑、施設を拡充してほしい。
- ・現在文化財に指定されていない資産も保存活用の支援が必要だと思う。
- ・見える化の一つの手段として地中に眠っている外堀を地上にあぶりだしてはどうか。
- ・家康の遺品が岡崎市に一つもない。目玉となる品を購入し、常時三河武士のやかた家康館等に展示してはどうか。
- ・歴史好きの女性をターゲットにしたソフトの取り組みが意見に挙がって良かった。四天王の石像を楽しみにしている。
- ・額田の天野家の朱門や西尾市の寺に払い下げられた門等、市内外に散逸している岡崎城の門などを買い戻し、展示してはどうか。
- ・インターネットを使った情報発信を強化してほしい。
- ・PRのために、一人ひとりが思いを持って広げることが大切だと思う。
- ・岡崎城址公園は岡崎市の重要な史跡の一つだと思う。清海堀や風呂谷曲輪付近の石垣のように、現存する数少ない箇所をもっと大切にすべきではないか。
- ・歴史的資産はどこにでもあるものではなく、岡崎市にしかないものがたくさんあるとわかった。今後もっとそれらを大事にしてほしい。
- ・岡崎城を再認識することができ、大変良かった。
- ・シンポジウムで話された内容の実現に向け頑張してほしい。
- ・ありがとうございました。今後も参加し、自分のまちをもっと知り、子どもたちに伝えたい。
- ・岡崎市が歴史の宝庫として注目されるまちになると良いと思う。
- ・観光にみえる方に魅力が伝えられるよう、今後勉強していきたいと思う。次回も楽しみにしている。

参考資料

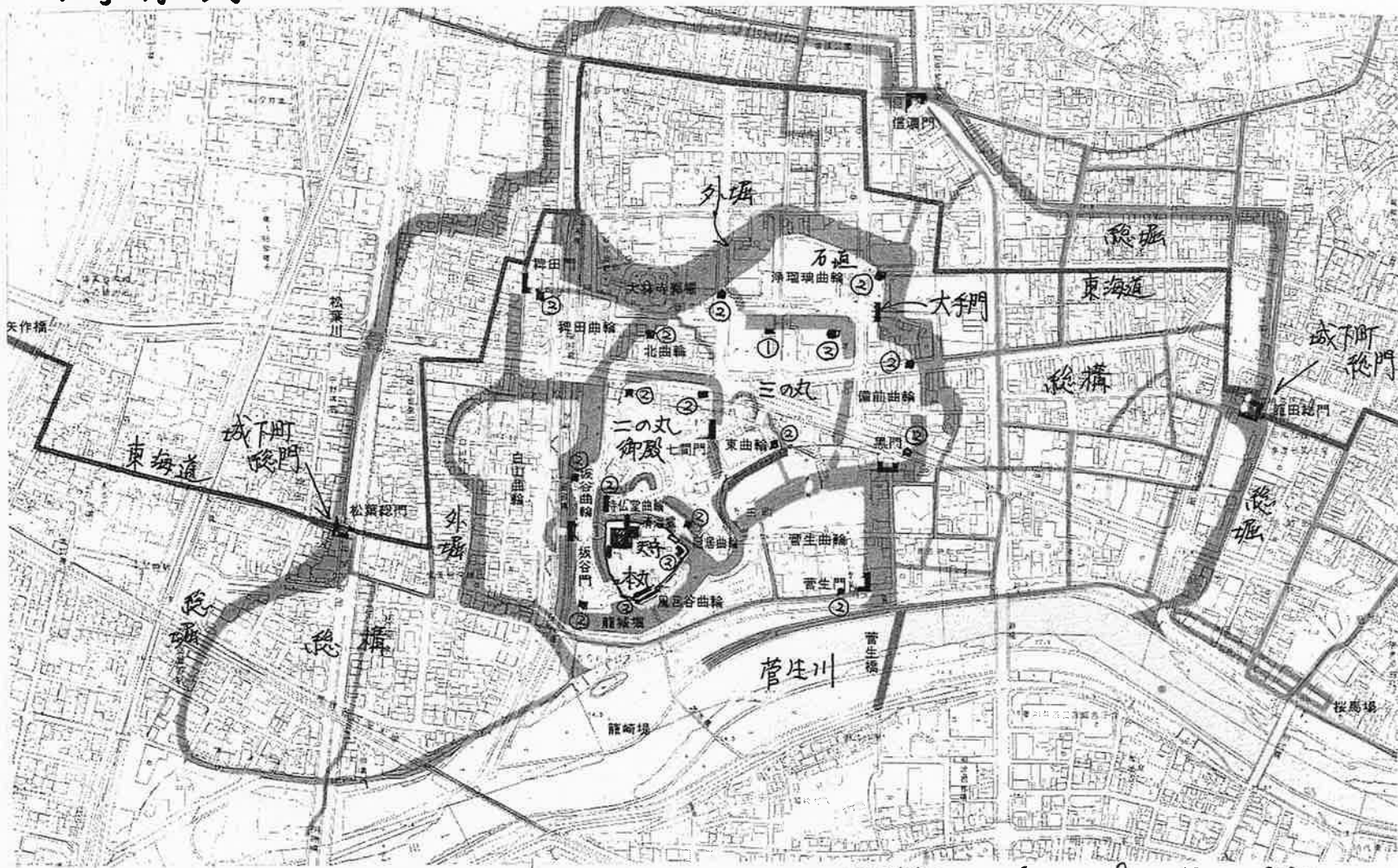
次頁より、シンポジウムで配布された資料の一部を掲載します。

1. 岡崎城跡（江戸時代後期）と市街地の重ね図
2. 三浦先生配布資料①
3. 三浦先生配布資料②
4. 三浦先生配布資料③
5. 三浦先生配布資料④
6. 三浦先生配布資料⑤

岡崎城跡（江戸時代後期）と市街地の重ね図



岡崎城



岡崎城 (愛知県岡崎市)

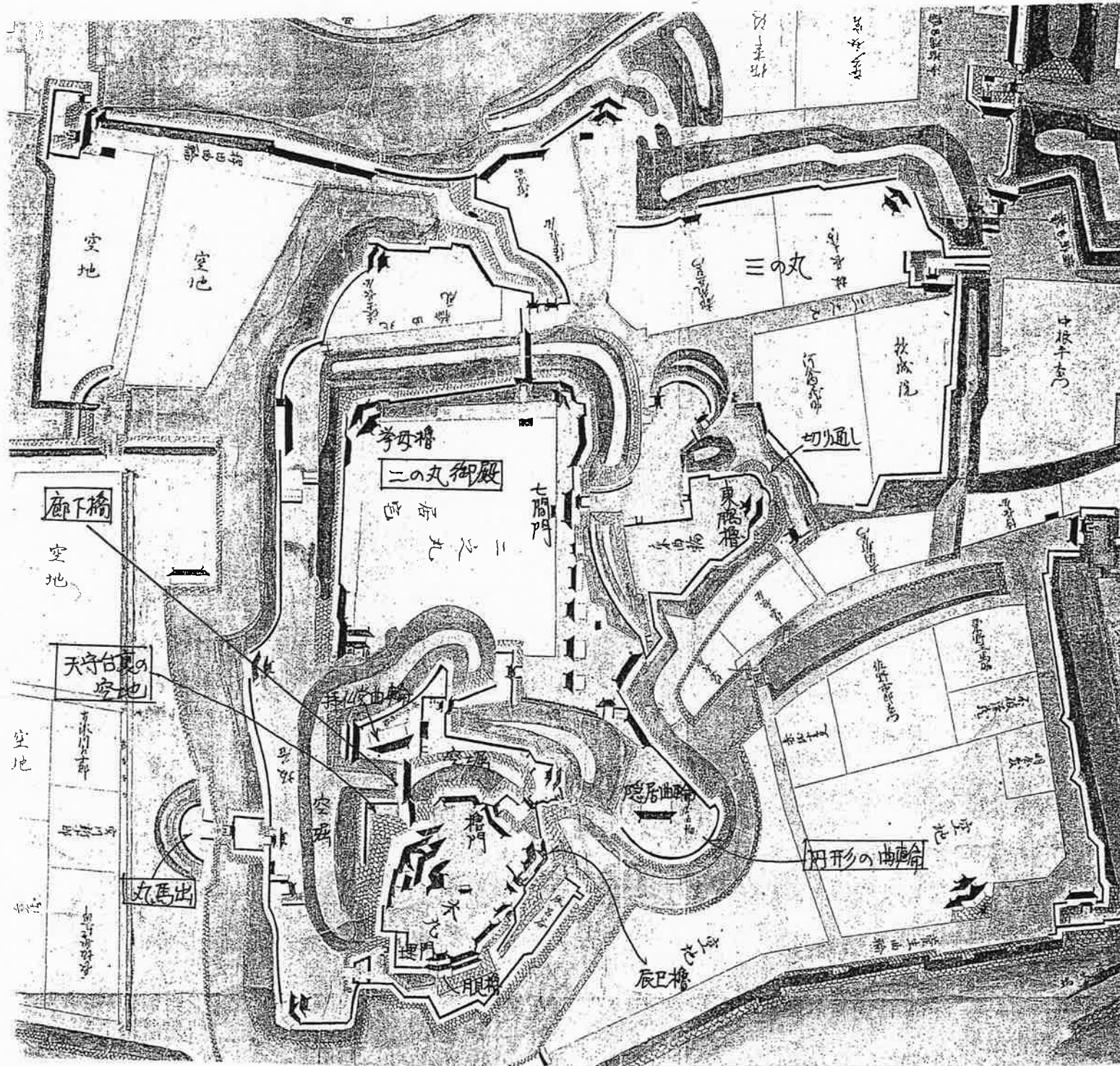
- 松平氏 (徳川氏) の居城
- 徳川家康が改修
土塁
- 天正十八年 (1590)
家康の関東移封。
秀吉の配下の田中吉政入城
岡崎城の改修
天守・石垣
- 慶長五年 (1600)
田中氏の柳川移封。
徳川譜代の城に改修
- 元和三年 (1617)
天守再建

『新編岡崎市史』より 1/8000 0 100 200m

天守 三重三階、小天守 (井戸櫓) 二重二階
 二重櫓 17
 平櫓 1
 多門櫓 10

櫓が多い、城域が広大
 田中吉政の好み 5万石 (→ 10万石)
 柳川城 (福岡県) 30万石

平山城 梯郭式
 本丸・風呂谷曲輪・大御門湯のみ石垣 (田中氏)
 土塁の不整形な小郭の連列 (徳川氏)



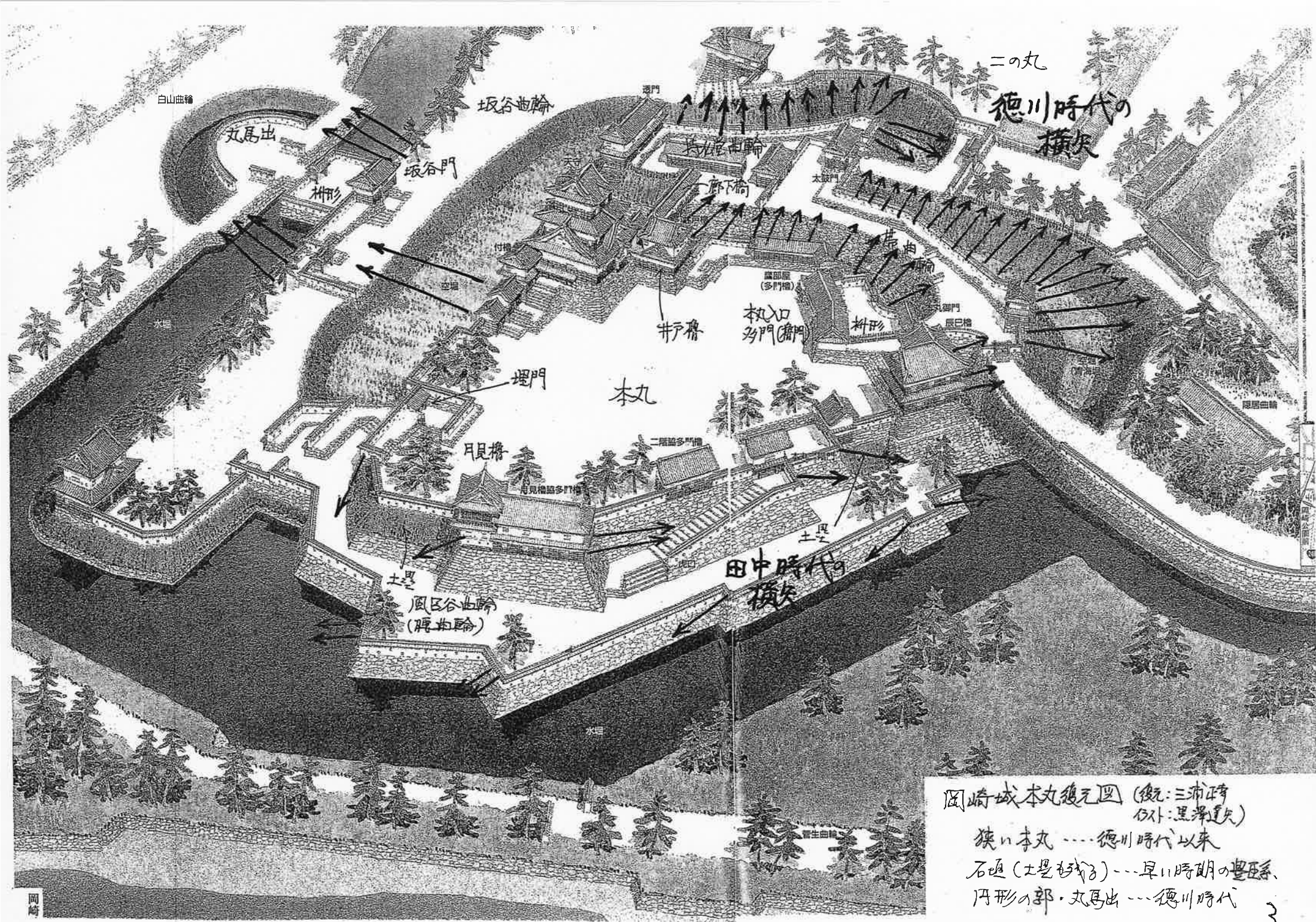
徳川家康の城の特色

- ・本丸が狭く、不整形
(御殿は二の丸に)
- ・土塁のみの城
- ・狭い空堀
- ・丸味をもった小さな曲輪(郭)
- ・丸馬出

豊臣系の城の特色

- ・天守
背後に狭い空地(豊臣大坂城)
- ・石垣

沼崎城絵図

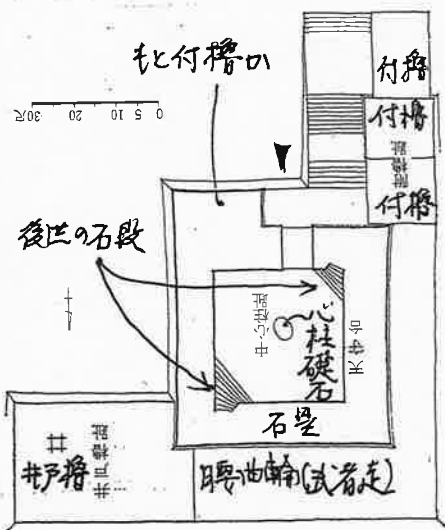


二の丸
徳川時代の
横矢

田中時代の
横矢

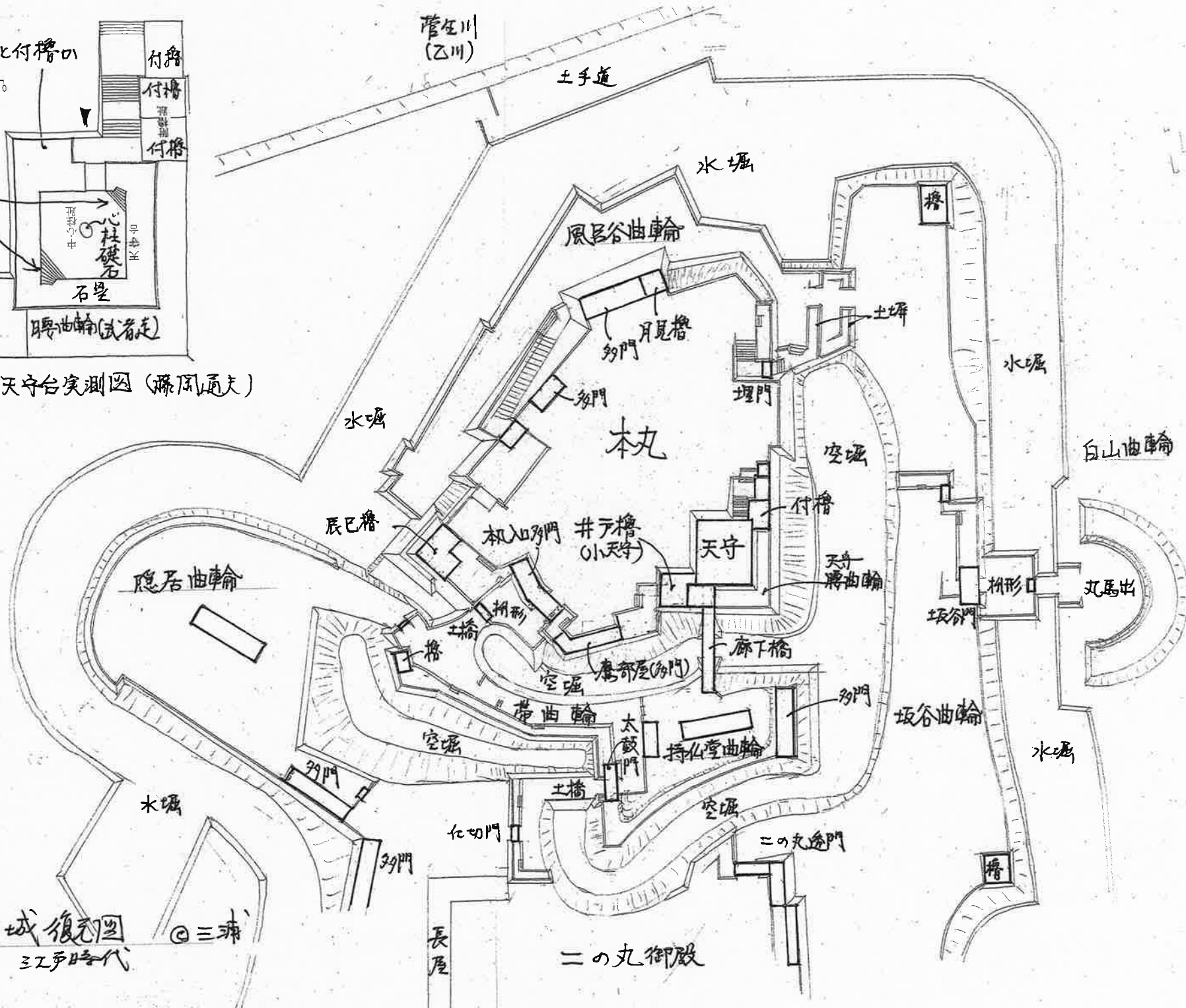
岡崎城本丸復元図 (後:三浦正
石外:黒澤運次)

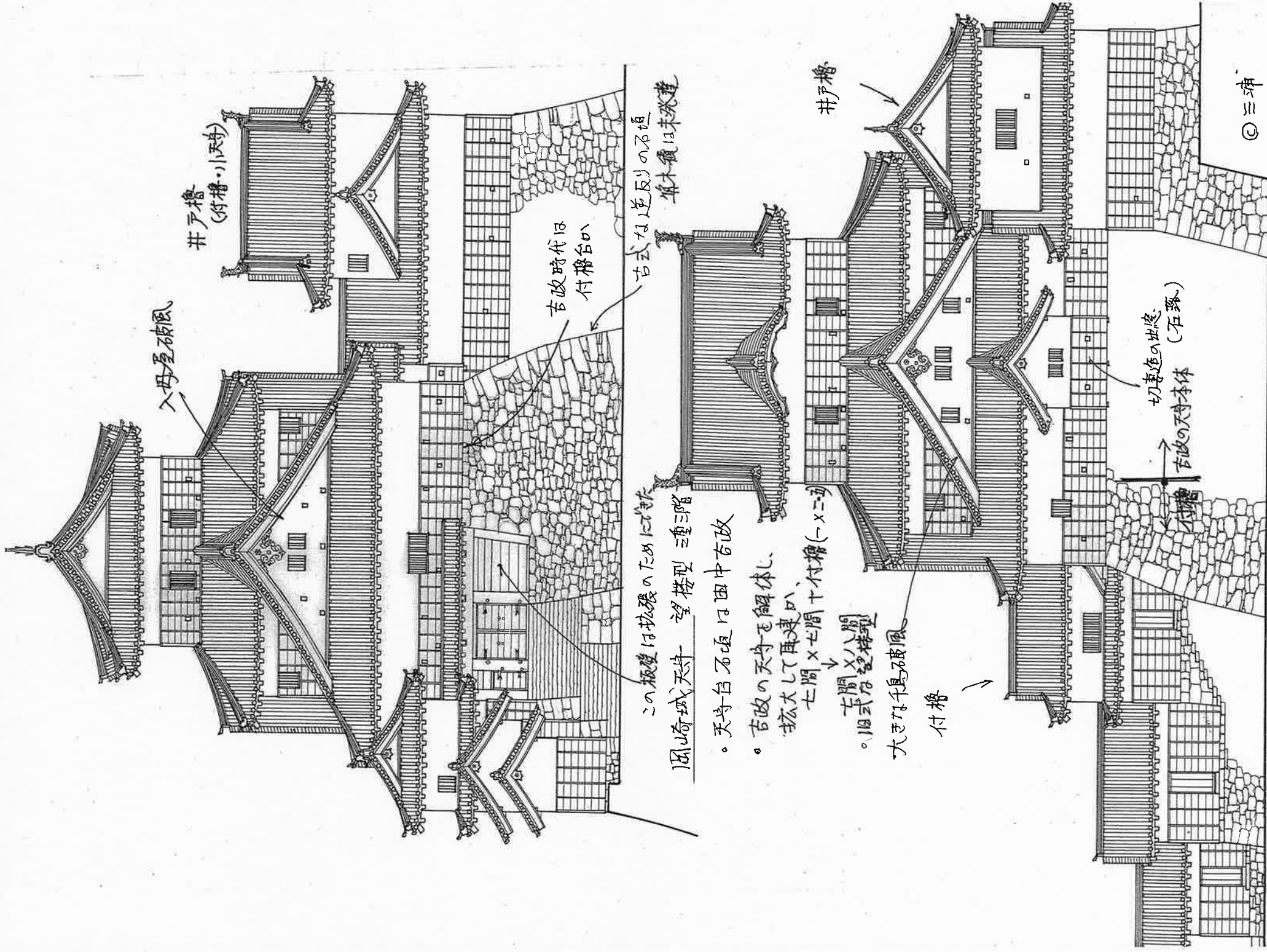
狭い本丸……徳川時代以来
石垣(土塁が残り)……早い時期の豊臣系
円形の部・丸馬出……徳川時代



天守台実測図 (藤風通夫)

岡崎城復元図 江戸時代 ©三浦

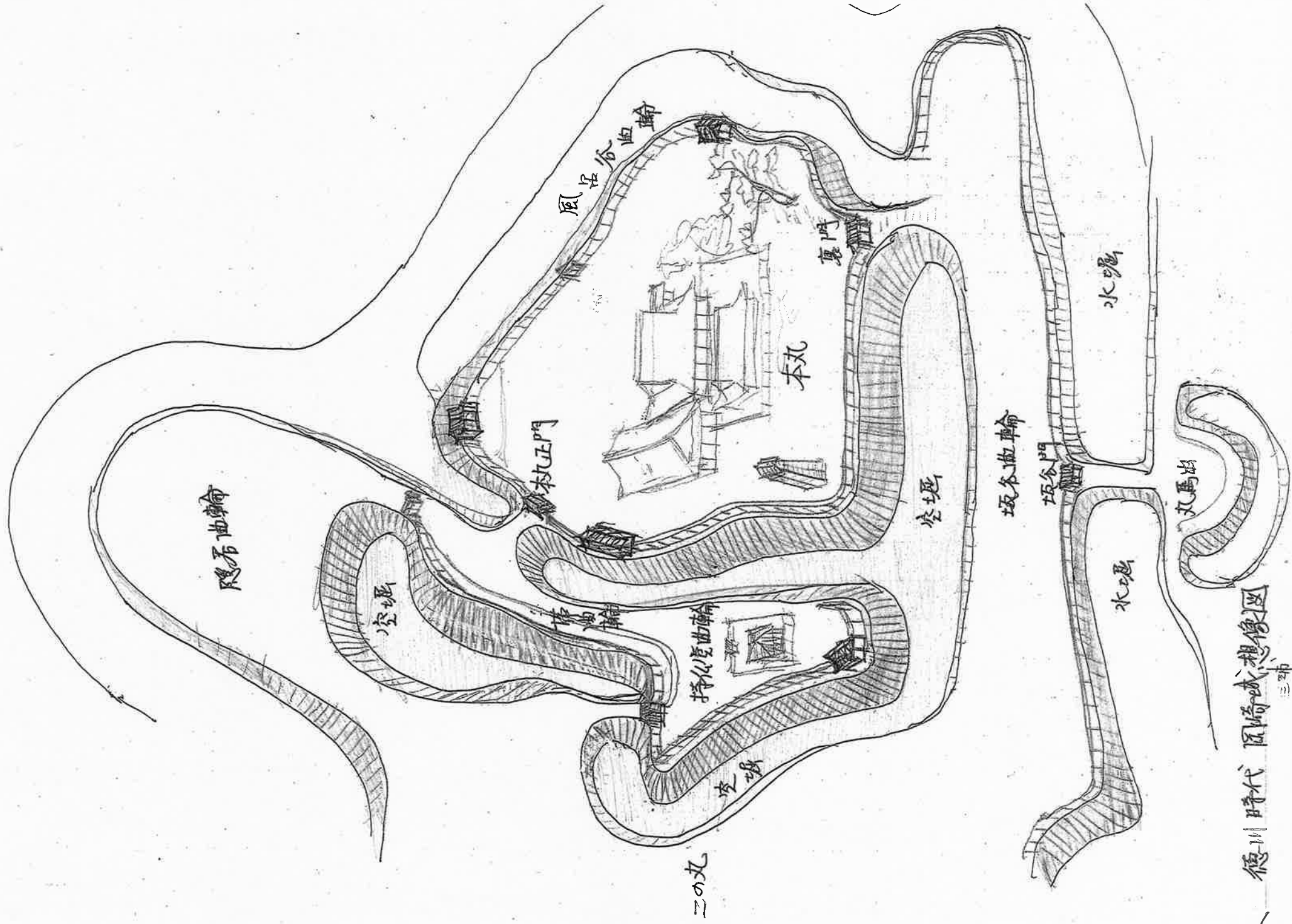




この複製は拡張のために拡大
 岡崎城天守 望楼型 三階

- 天守台石垣は田中古政
- 古政の天守を解体し、拡大して再建し、七間×七間+付櫓 (-x二辺)
- 古式な望楼型
- 大きな千鳥石破風

付櫓



徳川時代 岡崎城想像図